

# 道類楯

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年十一月三十日印刷(毎月一日)  
昭和六年十二月一日發行(一回發行)

## 類男世孺

才不年  
十二月号

あん久



天下の銘酒

シ  
ラ  
ユ  
キ  
白雪

味よし香よし  
品がよし  
酔は又よし  
朗かに

攝津・伊丹・灘 小西本店

風味必ず御氣に召す

天ふら御料理

季節日本御料理

世居情緒と食道樂  
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

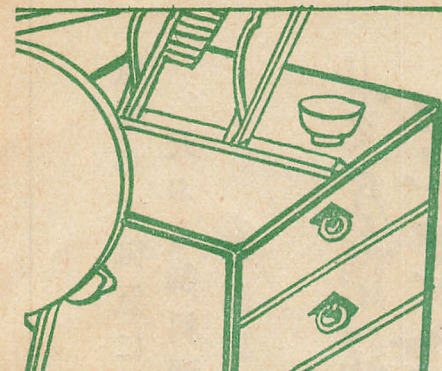
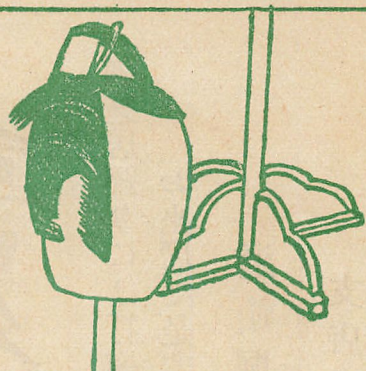
道頓堀戎ざし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋





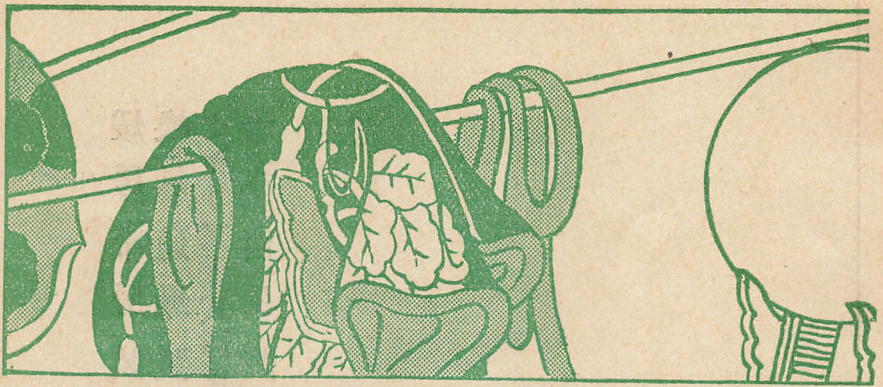
道頓堀 昭和六年顔見世號 第六年 第六十三輯

松竹興行株式會社取締役會長白井松次郎、同社長大谷竹次郎、同事務白井信太郎、同看板に飾られた四條南座、南座吉例顔見世興行、壺の部、梶原平三試名、龜治郎の梶原平三景時、都路豐後、壽三郎の蜂屋喜右衛門、福助の都路豐後、松萬の娘梅野、箱登羅の石原彌太郎時藏の女お秋、左升の柴田半左衛門、良寛と子守、勘彌の良寛、しうかの小娘およし、佐々木高綱、左團次の佐々木四郎高綱、蓮升の佐々木木太郎定重、しうかの娘薄衣、左升の僧智々木、勘彌の馬飼子之介、勘進帳、吉右衛門の富樫左衛門、幸四郎の武藏坊辨慶、福助の源判官義經、夜の部、菅原傳授手習鑑、吉右衛門の武部源藏、幸四郎の松王丸、壽三郎の春藤玄蕃、時藏の女房戸浪、鳴神、左團次の鳴神上人、松萬の雲の經間、梶久末松山、新町茨木屋の場頭、福助の松山太夫、壽三郎の柴田定之進、福治郎の梶屋久兵衛、市藏の天滿屋喜之助、魁車の番頭、右衛門、積懸雪關扉、勘彌の良峰少將、幸四郎の關守關兵衛、時藏の小町姫、勘彌の小町櫻の精、角座師走興行花形大歌舞伎、心中萬年草、扇雀の成田久米之助、延太郎のお梅、橋三郎の伊吹千右衛門、雁之助の作右衛門、鶴山姫捨松、扇雀の中將姫、吉三郎の岩根御前、釣女、長三郎の太郎冠者、扇雀の醜女、艷容女舞衣、扇雀のおその、壽會我對面、駒之助の十郎祐成、壽之助の五郎時致、槍一筋三島驛路、長三郎の平井權八、成太郎の品川伊平太、近江源氏先陣館、扇雀の佐々木盛綱、九團次の和田秀盛、吉三郎の母微妙、中座師走興行會我廼家五郎劇、畏から畏、五郎の勝山貞次郎、日支隣同士、山田看板店の前の舞臺面、五郎の山田萬吉、大磯の菊子、五樂の大瀧茂兵衛、畏から畏、四郎の樽島章、五郎の勝山貞次郎、小次郎の佐久間源兵衛、大磯の延子、笑ひを忘れた人々、蝶六の福井卯之助、五郎のルンペン、吉三郎結婚第一夜、五郎の前川健一、大磯の主婦お棍、桃蝶の花祭、浪花座師走興行淡海劇、笑顔、月ヶ瀬豊邸宅の場、旅鴉、京城の巻、魚屋多助の店先、淡海の魚屋多助、釜山の巻、魚屋多助の家の場

歌舞伎東西藝風の交流  
 人間創造  
 俳優への言葉  
 成瀬無極 (二〇)

梶久石切  
 鳴神と安永の黄表紙  
 鳴神問答  
 高安吸江 (六)  
 尾崎久彌 (二四)  
 森ほのほ (二六)

表紙.....(梶久末松山).....古版畫.....



◆鳴神のエロチシズム……………倉田啓明 (三三)

まはり年の顔見世に……………中村鴈治郎 (二八)

俳京の顔見世……………入江來布 (三〇)

◆顔見世・關の扉・高麗家……………西尾福三郎 (三二)

◆二つの古典劇(鳴神と關の扉)……………高谷伸 (三五)

佐々木高綱(おほむ石)顔見世晝の部……………(二〇)

梶原平三試名劔(おほむ石)同……………(二二)

鳴神(おほむ石)顔見世夜の部……………(一七)

椀久末松山(見たま)同……………(八)

▽顔見世の思出△

顔見世の今昔……………大川澱江 (二〇)

下駄と合住居……………中村魁車 (二二)

一九三二年を送る……………大川澱江 徳田純宏 (三九)

道頓堀座談會……………山上貞一 鳥江鏡也 (三九)

□劇壇往來……………(四四)

◇編輯後記……………(四六)

◇挿繪カット……………田中滿彦

煖房冷房裝置  
換氣通風裝置  
キヤリアー式淨化槽  
給水衛生裝置

設計施工

# 古市商會

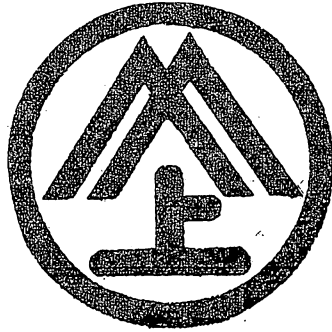
京都市下立賣千本町西入

電西陣四六〇七番

古市工場

京都市西ノ京伯樂町

電西陣五五七七



本店 大阪市東區今橋三丁目

京都市三條通寺町

株式會社 鴻池銀行三條支店

電話本局 三四五六番  
振替大阪 三四五七番  
座 六四四六二番

お庭先で記念撮影

どなたにも使ひ易い

# パレットカメラ

十七圓

お兒様向きの

# さくらカメラ

三圓五十錢

いづれもベスト型八枚續  
ロールフィルム用

カタログ進呈

寫真機及小型活動寫真機

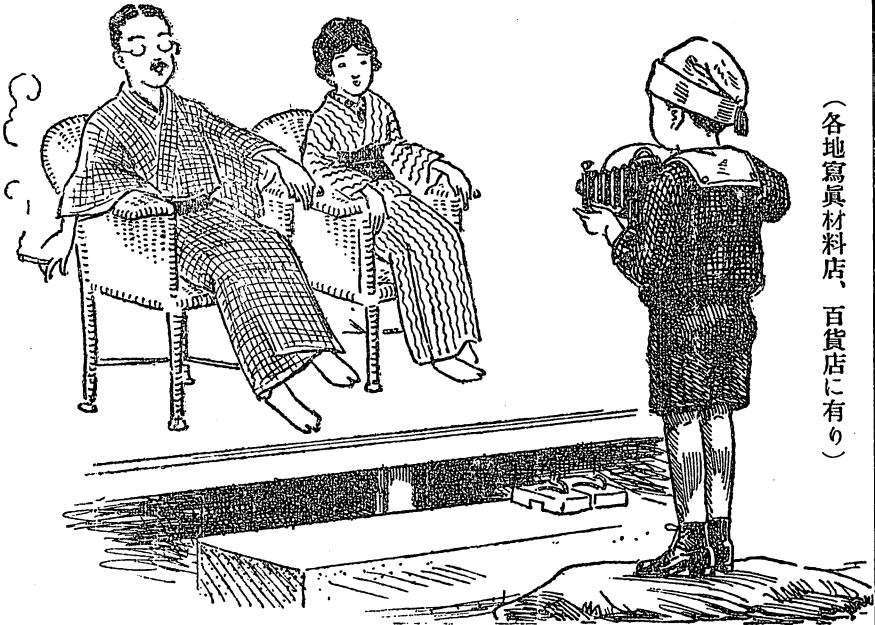
小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋

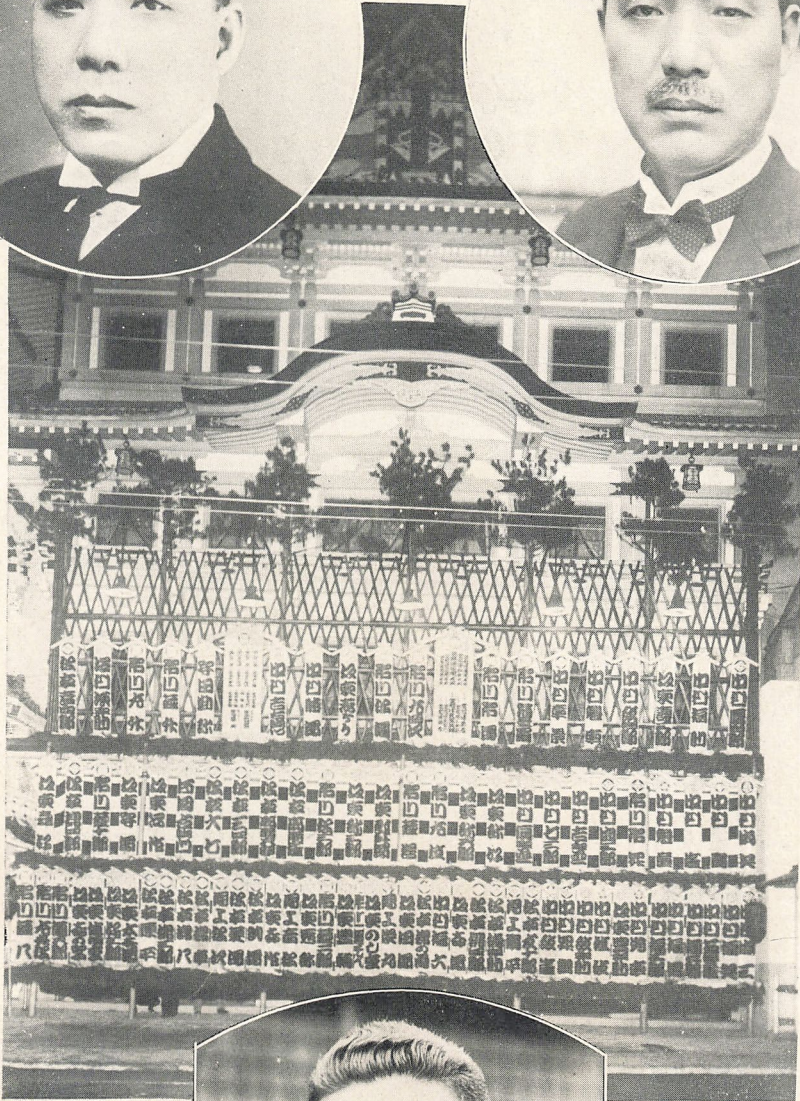
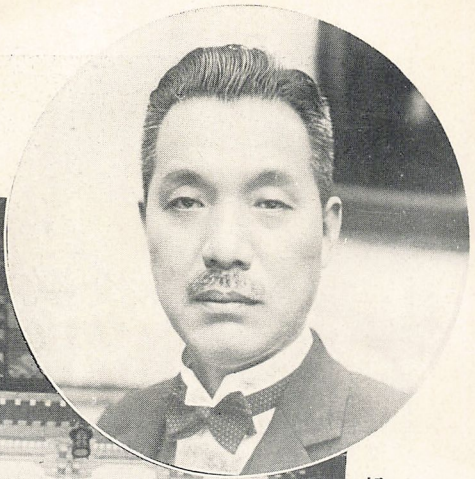
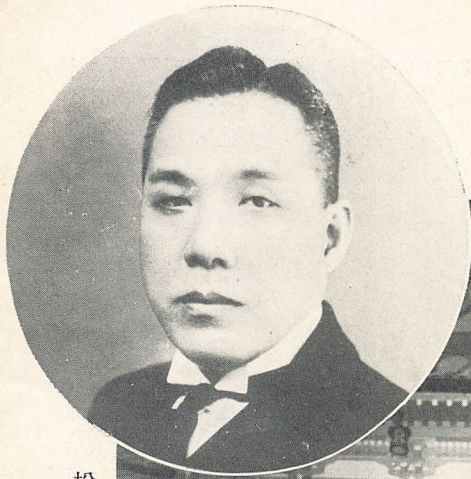
電南

二三九二  
三三〇四  
三九八三番

(各地寫真材料店、百貨店に有り)





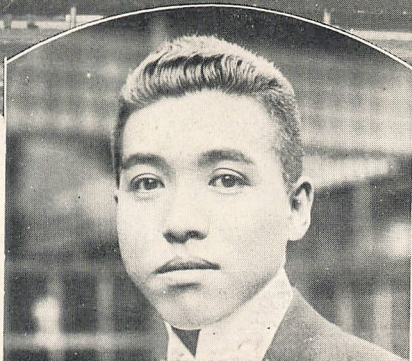


松竹興行株式會社取締役社長

大谷竹次郎

松竹興行株式會社取締役會長

白井松次郎



松竹興行株式會社  
専務取締役 白井信太郎



招看板に  
飾られた

四條南座



場の寺合星倉鎌 〃 劔名試三平原梶 ” (部の晝) 行興世見顔例吉座南

郎治鷹村中・時景三平原梶

# 南 薩 額 見 世 御 扱 待

賣出期限

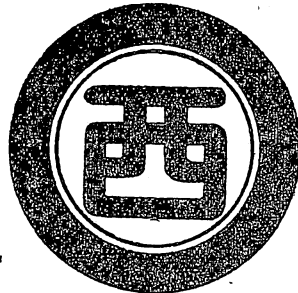
自昭和六年拾月廿日  
至昭和六年拾一月末日

出荷分に限る

- 丸西醤油大樽四挺毎ニ 特等席入場券壹枚呈上
- 丸西醤油大樽參挺毎ニ 壹等席入場券壹枚呈上
- 丸西醤油大樽貳挺毎ニ 貳等席入場券壹枚呈上
- 丸西醤油小樽貳挺毎ニ 並等席入場券壹枚呈上

兵庫縣上郡町 丸西醤油株式會社

入場券ハ御買上店ヨリ差上ゲマス





裂 小・具道小

# 貸 衣 裳

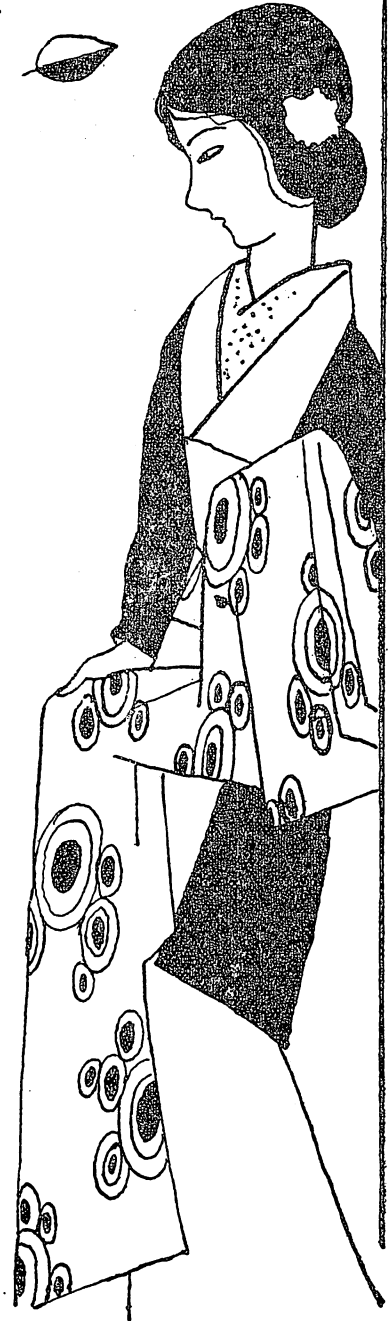
素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

## 松 竹 衣 裳 部



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

本店

東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内

電話 戎 五 六 三 四 番

東京市淺草區並木町十五

園電話淺草五五九九番

新 聞 以 外 の 廣 告 機 關

鐵道・電車各驛廣告  
京都市電回数券廣告  
同 電車內廣告  
京都市內湯屋廣告

取 扱

# 實業廣告

ネオンサイン看板

設 計 製 作

御申込に依り  
營業案内進呈

京 都 三 條 寺 町 角  
電 本 四 三 二 〇 番

電氣諸材料卸問屋

株式  
會社  
美 笠 電 氣 商 會

京都市寺町通り姉小路上ル

電 話 上 (一六〇七番  
五六八二番

大阪市北區曾根崎上三丁目二七

電 話 北 (二四五三番  
六五一二番

東京市芝區兼房町十四

電 話 銀 座 (六三三九番  
六二二五番



南座のちもと食堂

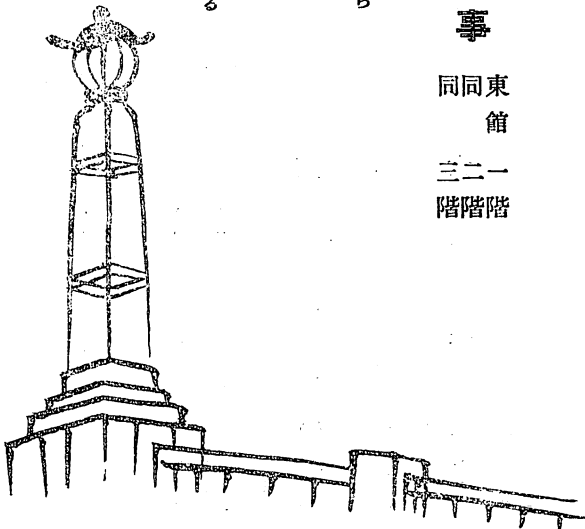
御手輕な

觀劇幕間の御食事

東館 三階  
同館 二階  
同館 一階

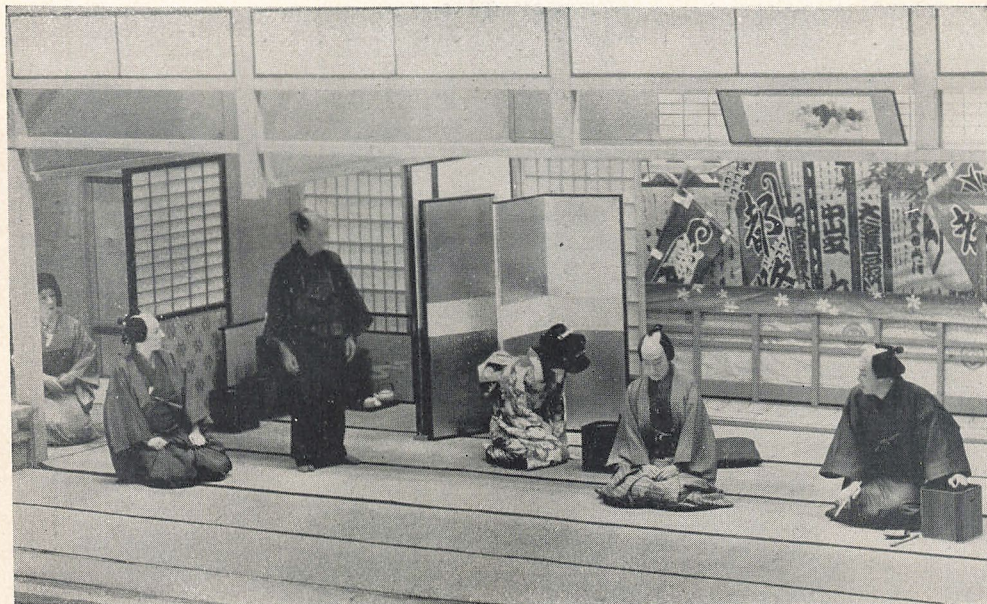
京で名題のちもとの料理  
顔見世芝居は四條南のやぐら  
料理の粹と  
芝居の至寶  
こゝは皆様の御承知どふり  
うまい料理はちもとにかぎる

本店 京・西石垣・千茂登

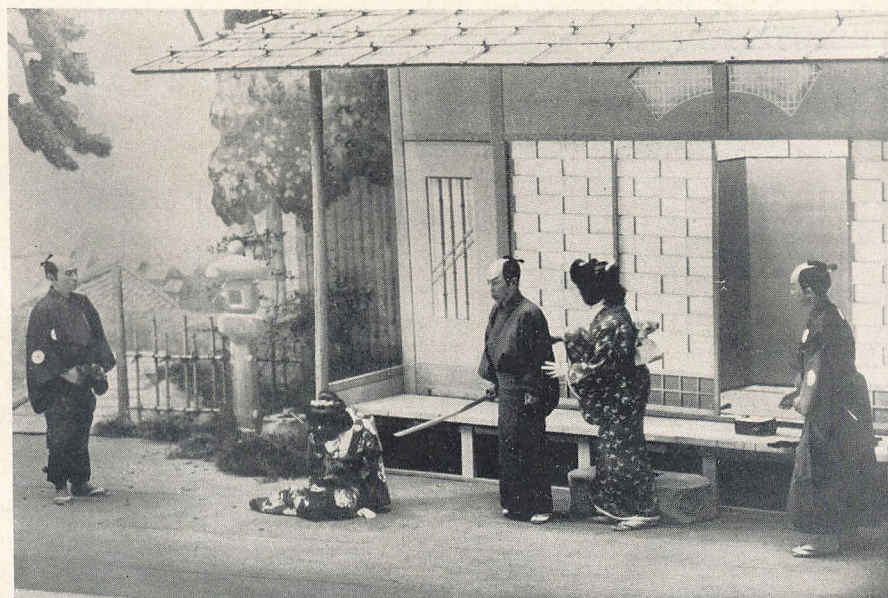


場の屋茶前の座村中 “ 掾後豊路都 ”

升菴川市・夫太字文弟門 羅登箱川市・郎太彌原石 葛松川市・野梅娘 助福村中・椽後豊路都 郎三壽東阪・門衛右喜屋峰



羅登箱川市・郎太彌原石 葛松川市・野梅娘 升左川市・門衛左半田榮 藏時村中・秋お女下



柴田邸の場

南座顔見世(畫の部)

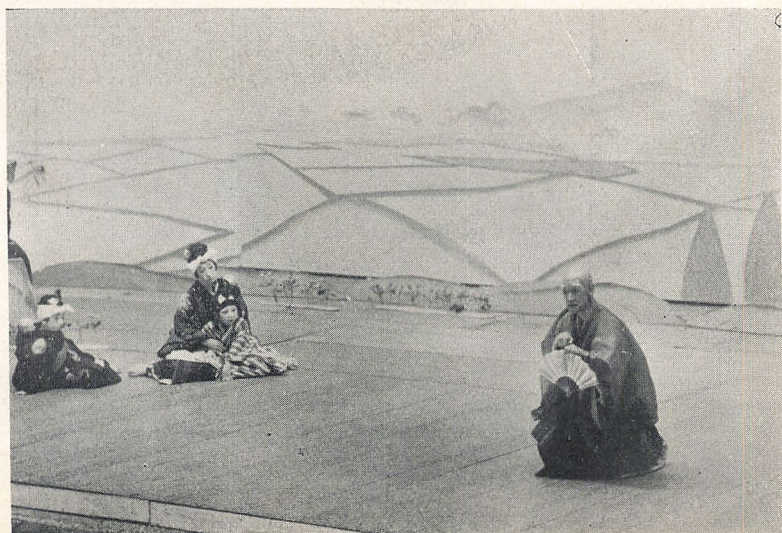
南座顔見世興行 (畫の部)

『良寛と子守』

良寛・守田勘彌



越後國西蒲原郡  
或村はづれ地蔵堂の前



良寛・守田勘彌  
かしろよお娘の小村

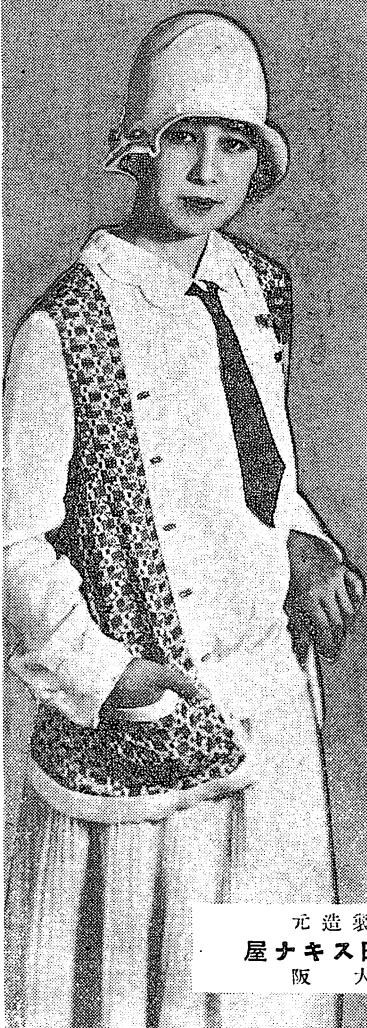


お陰様で日々  
御愛用下さる  
方が  
増加して参り  
ます



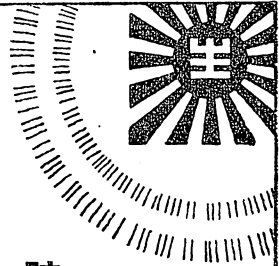
# スキナ 脂取紙

あぶら



元 造 裂                      ル 寛 發  
 屋 ナ キ ス 田 中    ◇    社 會 式 株 堂 日 朝  
 阪 大                      阪 大

# 大同生命



若ければこそ

保険は必要

貯蓄にも投資にも

有利な配當付

特別養老保険



贈案  
呈内

堀佐土 阪大 社本

「香花戯曲  
十種の内  
佐々木高綱」

江州佐々木庄高綱邸の場

佐々木四郎高綱・市川左團次



升 左・山智僧 かうし・衣薄娘  
彌 勘・介之子飼馬 升 筵・重定木々佐  
次 團左・綱高木々佐



◇ 畫 の 部 ◇

富樫左衛門・中村吉右衛門



源判官義經	武藏坊辨慶	富樫左衛門	中村吉右衛門
中村福助	松本幸四郎		

南座 顔見世興行

武藏坊辨慶・松本幸四郎



歌舞伎十八番の内

『勸進帳』

安宅の關の場

南座 顔見世 興行

『菅原傳授手習鑑』

◇ 芹生の里寺小屋の場 ◇



武部源藏・中村吉右衛門

春藤玄蕃・阪東壽三郎



◇ 夜の部 ◇

官報並詰新新聞雜誌の  
**廣 告 業**

株式會社  
**京華社**

京都市三條通烏丸東入

東區北浜四丁目 **大阪支店**  
 電話 四七五三  
 米町五丁目 **神戸支店**  
 電話 四二五・七七八

電話代表本局三三三〇

南大津町千目共済ビル **名古屋支店**  
 電中局二〇五五  
 丸の内三樓二十一号館 **東京支店**  
 電丸の内五〇・五〇四・五〇五

天婦ら

壽司

小鉢

京南座東隣

南座東別館  
(二階三階食堂)

志

矢満

倉屋

鮮支

店

電 祇 二 五 五 五 六 番

麻雀 トランプ

百人一首 花カルタ

其他御手遊び品...

各種... 取揃

京の名物版畫封筒の出版元

ええら井屋

京・三條新京極角

電話本四六五二番

振替大阪六七二四二番





お茶のお菓子に  
おつかひものに

昔ながらの味ひ残る

祇園 銘菓 菊 壽 糖

阿波國産純和三盆白製

京四條通祇園町北側

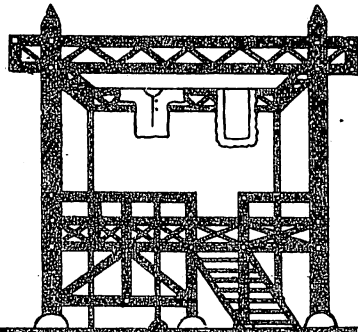
京菓子司

鍵 善 良 房

電話祇園(6)二八一八七番

# 干物のツテイバサ

クサラヌ  
亜鉛引



木製より安くて丈夫です  
組立式に付轉宅自由

京都繩手四條南入

都 金 物 店

鐵 工 部

電話園(6)二六六番

アサヒ  
ザッポロ  
ビール

飛躍の

源泉となり

團練の

糧となる……



アサヒ  
ザッポロ  
ビール

アサヒザッポロ  
清涼飲料

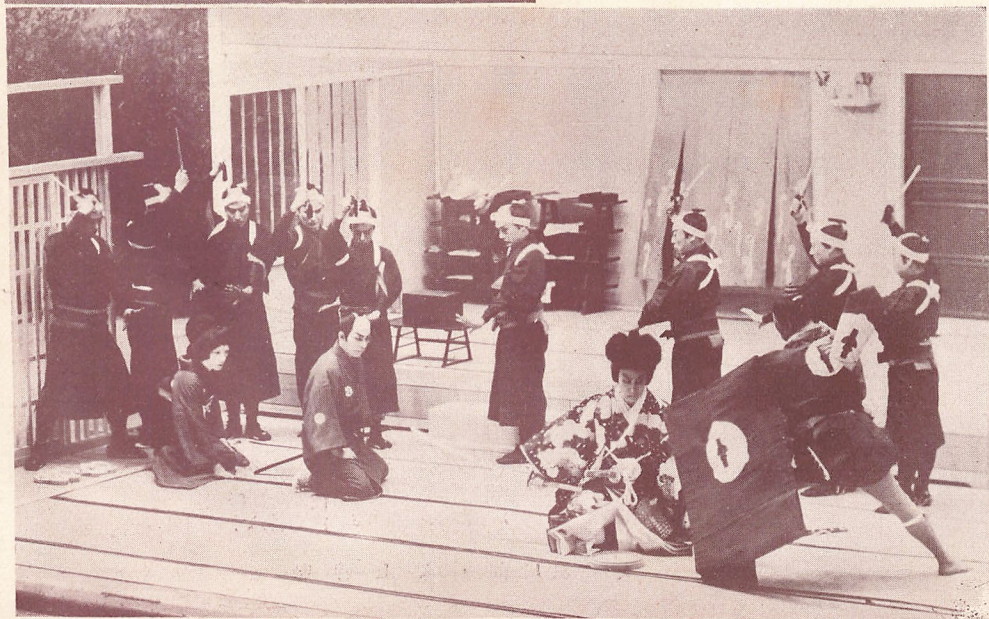
(歳暮贈答用)  
(化粧入函)

大日本酒株式会社



松二王丸・松本幸四郎

春藤玄蕃 阪東壽三郎  
 松王丸 松本幸四郎  
 武部源藏 中村吉右衛門  
 女房戸浪 中村時藏







京都市烏丸通丸太町

京都日日新聞社

電話上局 (※三六・三七・三八・三九・四〇番)  
(長四八・四九・五〇番)  
振替貯金口振大阪二九〇二三番

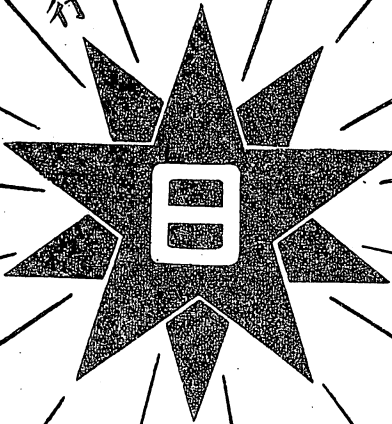
事實が證明せる

この奇蹟的大飛躍を見よ！

最新式の設備

大京都の代表新聞

毎日一回発行

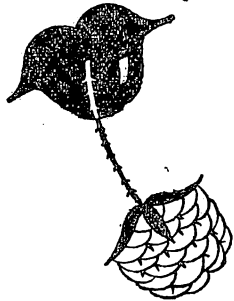




東洋一の豪華を誇る社交場の最高峰

合資会社

# 高橋食堂 CAFE TAKAHASHI



- 心齋橋高橋
- 堂元サロン高橋
- 新世界高橋
- 天四高橋
- 京都高橋

無料進呈  
バーマネント・カレンダー  
二十ヶ年の七曜歴が面白く表れ希望と幸福  
をキヤツチする、断然三二年度のカレンダ  
ーを御希望の方に進呈致します貳銭切手封  
入大阪市中心齋橋高橋食堂事務所へ



北山岩屋の場 幕切れの舞臺面

鳴神上人・市川左團次 雲の絶間姫・市川松蔦

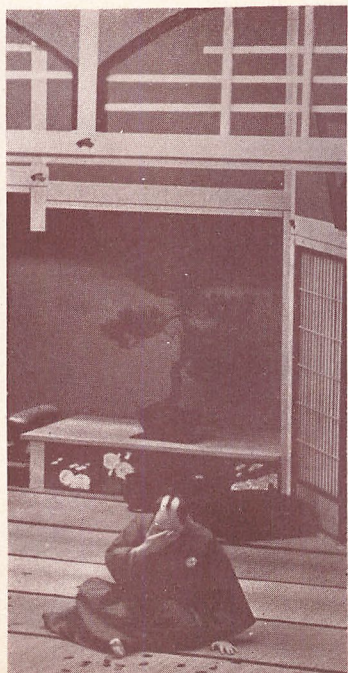


◇ 部の夜 ◇ 行興世見顔座南

『玩辭樓十  
二曲の内』  
椀 久末松山



助 福 村 中 ・ 夫 太 山 松 屋 扇







新町茨木屋の場

柴田定之進

阪東壽三郎

松山太夫

中村福助

梶屋久兵衛

中村鷹治郎

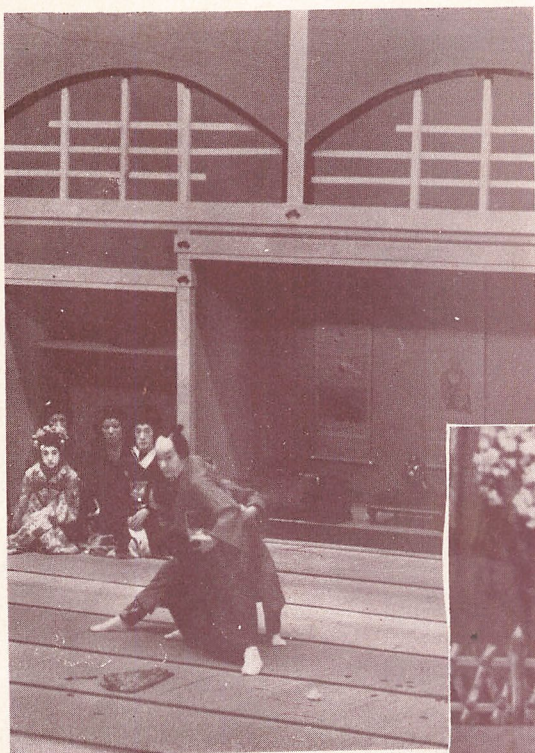


梶屋久兵衛

中村鷹治郎

玩辭樓十二曲の内

『椀久末松山』



新町茨木屋の場舞臺面

天満屋喜之助・市川市藏

◇ 部之夜 ◇ 行興世見顔座南



車魁村中・門衛右嘉頭番



關守關衛兵

實は伴主・松本幸四郎  
 小野小町姫・中村時藏  
 良峰少將・貞守田勘彌



精の櫻町小 實は染墨城傾  
 關守田勘彌

『積戀雪關扉』

逢阪山新關の場

南座 顔見世 興行

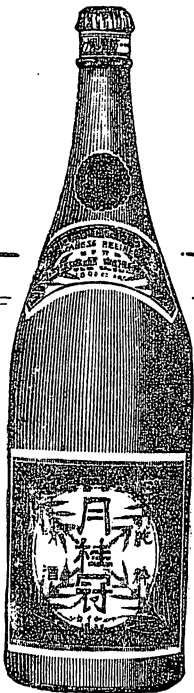
夜の部

酒 青  
月 桂 冠

皆様の御酒 この芳醇

品質第一

絶対に防腐剤を含まず



達用御省内宮  
釀吟店商吉恒倉大

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

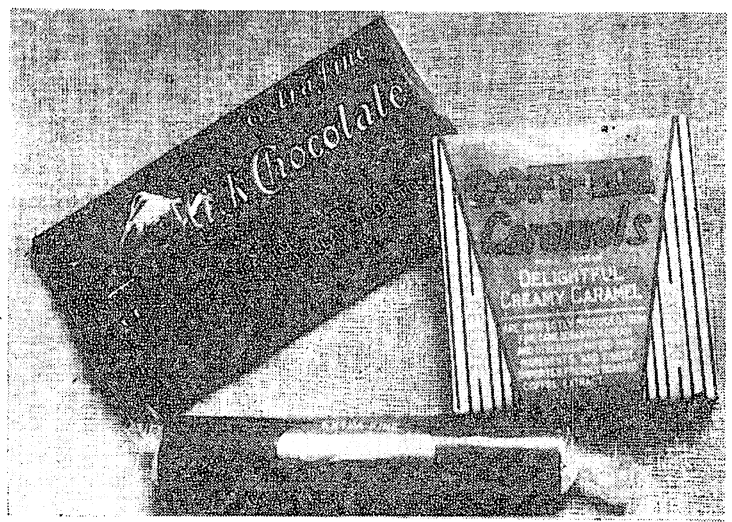
コーヒキヤラメル

チヨコレート  
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)二六六一番



角座師走興行  
花形大歌舞伎

“中心萬年草”

成田久米之助・中村扇雀  
娘 和梅・實川延太郎



美濃屋作右衛門・中村鷹之助



『鷓山姫捨松』

中將姫雪責の場



伊吹千右衛門・嵐橋三郎



岩根御前・嵐三郎  
中將姫・中村扇雀



艷容女舞衣

おその  
・ 中村扇雀



醜女・中村扇雀



→  
曾我十郎祐成・中村駒之助  
曾我五郎時致・阪東壽之助  
『壽會我對面』



明治十二年創刊

朝夕刊八頁

日曜日夕刊發行  
他二日曜日出、日曜講談無代添付



購讀料

朝夕刊 一ヶ月 金七拾錢  
夕刊ノミ 一ヶ月 金四拾錢

十六ミリ  
最高級  
スプレッド  
撮影機  
映寫機

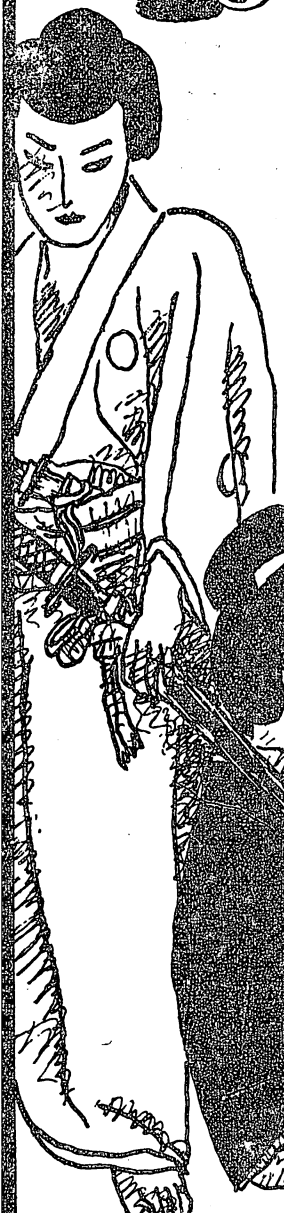
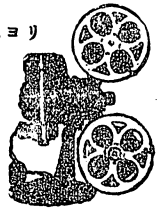
ステージの演技の撮影出来る高級活動寫真機で貴下の演劇  
趣味を更によりよるこばせて下さい。フィルムは世界で最高位  
の専門會社ベル・ハウエルの製品でスタヂオカメラの姉妹  
品です。その特殊シャッター・クックレンズ及シャットル。  
メカニズムにより貴下は如何なる場合にもボタンの一押で  
明快なる映畫を自動的にお作りになれます。

貴下の御家族、貴下の御趣味、貴下の御生活が生けるがま  
ゝに一卷の映畫となる、そしてこれを映寫して楽しむ  
この感激こそ娛樂以上です。

詳細は一流寫真機店へ御照會下さい。實物御賞驗をおす、め  
します。  
— カタログ呈 —

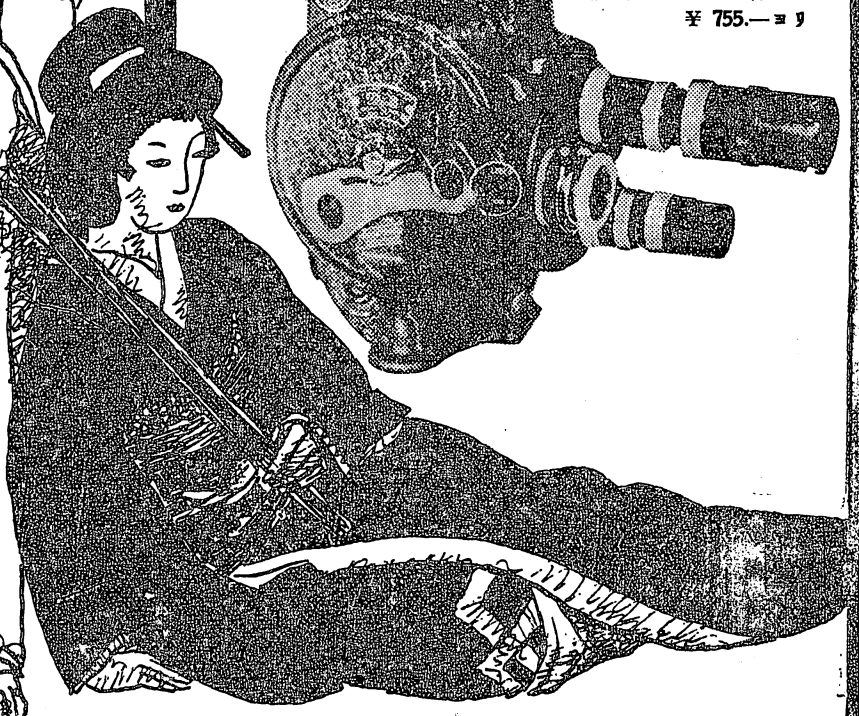
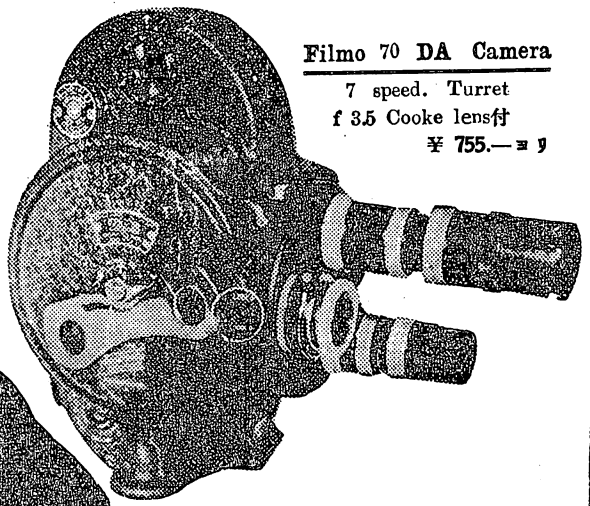
Filmo 57 Projector

250w型 ¥5.5.—ヨリ  
375w型 ¥750.ヨリ



Filmo 70 DA Camera

7 speed. Turret  
f 3.5 Cooke lens付  
¥ 755.—ヨリ



『定助 鎗一筋三島驛路』

平井權八・林長三郎



郎三長林・者冠郎太

所作事

『釣女』

角座・師走興行

品川伊平太・中村成太郎



『近江源氏先陣館』

盛綱首實驗の場



網盛衛兵郎三木々佐  
雀扇村中



次團九川市・盛秀衛兵田和

郎三吉嵐・妙徽母



行興走師・座角

寛壽郎映畫

阪妻映畫

大衆映畫

嵐 寛壽郎  
(二役主演)  
市川米十郎  
(應援出演)

阪東妻三郎  
(二役主演)  
鈴木澄子  
(特別出演)

大新第一直木  
興回三木  
文藝超一  
藝マネキ  
映畫提作原  
畫供品案

柳生十兵衛

牢獄の花嫁

回の丸若衆

松浦築枝  
(應援出演)  
仁科熊彦監督

吉川英治原作  
「クンキ」連載  
沖博文監督

尾上菊太郎主演  
市川菊之助初演  
後藤山監督



新與キネマ提供



大阪市東區京橋三丁目七五

株式會社

大林組

支店 東京、橫濱、名古屋、福岡

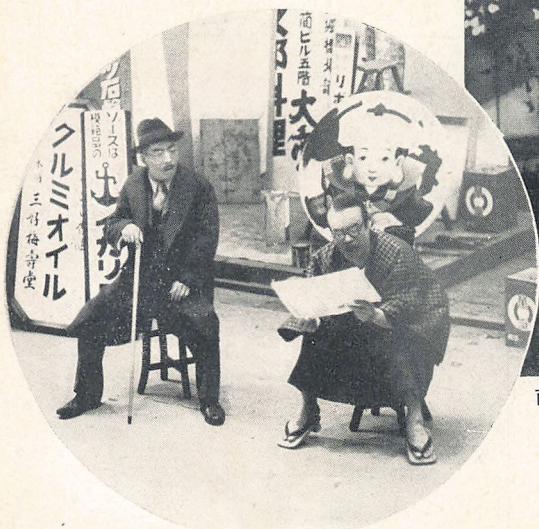
營業所 京都、神戶、金澤、靜岡、  
廣島、京城、臺北、大連

工作所 大阪、東京

中座師走興行

會我廻家五郎劇

『民から民』 五郎の 勝山貞次郎

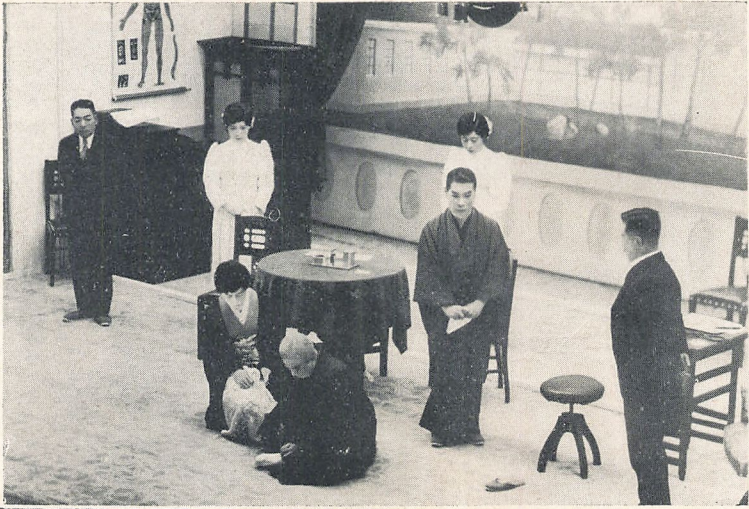


面臺舞の場の店板看田山 〃士同隣支日〃



五郎の 山田 萬吉  
大磯の 妻 菊子  
五郎丸の 大瀧 茂三郎  
五樂の 大瀧 茂兵衛

『民から民』



四郎の榊 島 章  
小次郎の佐久間源兵衛

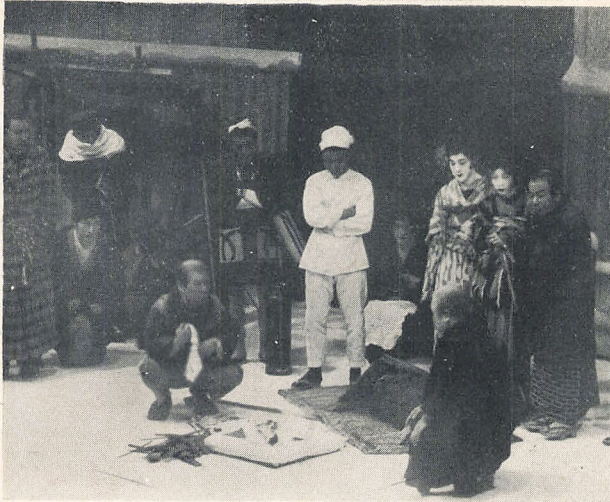
五郎の勝山貞次郎  
大磯の 延 子

中座・五郎劇

『笑ひを忘れた人々』

五郎のレンペン平吉

蝶六の福井卯之助



『結婚第一夜』

五郎の前川健一

桃蝶の花榮

大磯の主婦お程





國內國外

特許商標出願代理

特許實用新案意匠商標審判侵害事件  
其他一般工業所有權ニ關スル相談

大阪市南區鹽町通二丁目二十四番地

電船場三九六三番

中央特許事務所

辨理士 賴廣弘三

◆新聞雜誌廣告の御利用は  
◆火災保險の御用命は……

大阪高麗橋五丁目

株式會社

# 萬年社

電本局(二三)

長〇六九〇 四二七〇  
〇〇六九一 四二七一  
〇六九二

東京銀座一丁目

株式會社

萬年社東京支店

電京橋(五六)

長三五三六 三五三八  
三五三七

京都堺町通三條

株式會社

萬年社京都支店

電本局(二)

長二二八一 二二八五  
二二八二

浪花座師走興行

志賀廼家淡海劇

『旅鴉』 京城の巻

魚屋多助・淡海



『笑

顔』

月ヶ瀬豊邸宅の場舞臺面



『旅

鴉』

京城の巻

魚屋多助・淡海



『旅

鴉』

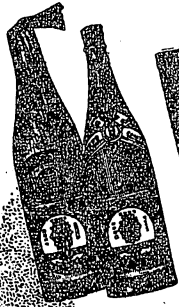
釜山の巻

魚屋多助の内の場



浪花座・淡海劇

# 宗正シンキ



絶對防腐劑ナシ

大阪市立衛生試験所證明章貼付

風味樽詰同様

一たん樽に詰め風味を

持たせた樽詰

堀野京都販賣店



## 桃谷印刷株式會社

大阪市東區鶴橋南一丁目

電話天王寺 二七六〇・二七六一

新 春 二 大 映 畫

佐々木味津三原作・志波西果脚色監督……………  
市川右太衛門主演・谷崎十郎特別出演……………

江戸帰天旗本退屈男

・ 大江美智子、高堂國典他總出演・

二川文太郎監督・小松春彦原作・片岡 清撮影  
林 長二郎・高田浩吉主演……………

弥次弁多美人騷動記

柳さく子、浦波須磨子、飯塚敏子、東 榮子、河上君榮、井上久榮、千曲里子、綾路恭子、  
北原露子、二條照子、藤島利子、志賀靖郎、小泉嘉輔、中村吉松、他總出演

松 竹 キ ネ マ

雜誌·究新劇演·刊月

十二月號

# 演類通

第六年

號世見顏·座南





# 歌舞伎東西藝風の交流

—— 鷹治郎と吉右衛門の顔合せ ——

林 久 男

又しても、霜枯れの四條河原に時ならぬ華を咲かせる顔見世どきとなつた。仰々しい矢來、まねきの下行く人のぞめきも、昔ながらの、ゆとりある情景である。

所詮、藝術は時代の所産である。時代が動くにつれて藝術も動いてゆく。數十年の傳統に依つて來た劇壇にも時代の流は留めどなく動いてゐる。

歌舞伎は今にも滅亡するやうに叫ぶ者がある。併しこれだけの永き傳統をもつた大なる藝術が、源水の獨樂や居合術のやうに、さう一朝にして滅びるものではない。その行くては滅亡か、轉化か。それは時流に棹さしてゆく歌舞伎自身の手であり、頭である。

最近、興行の合理化とか、俳優の融通交流とか云つて、東西俳優の頻繁なる往來が人の目を惹いてゐる。現に本年下半期に於ても、六月は鷹治郎一座の東上、梅幸、羽左衛門、幸四郎の西下。九月は菊五郎、福助の南座出演、壽三郎、福助（大阪）の歌舞伎座入り、十月は猿之助の中座出演、歌舞伎座に於ける東西成駒屋の顔合せ。十一月は吉右衛門一座の中座活躍等——これ等は寧ろ東西松竹の合併より來る興行政策の餘波とも見られないことは無いが、併しそれは、カフエーやバアや、大阪すしの銀座進出と等しなみに單なる時流とのみ看過することは出来ない。

東西情調の交流、東京演劇の融通——思ふにそれは奥深い



時代の要求に根ざして居ることが見られる。所詮は大なる轉動の前にある傳統的歌舞伎劇の空輪作用と見ることゝ出来る。それにしても、最近南座に於ける菊五郎の人氣や、中座に於ける吉右衛門の好劇家に對するあの人氣は何を意味するか更に東京移住まで傳へられるに至つた鷹治郎の東都に於けるあの持てはやされやうは、一體何を暗示して居るだらうか。由來、東都の觀客は頭で芝居を見、上方の觀客は心臓で芝居を觀ると云はれてゐる。俳優達の大體の藝風も自らさういふ方向に發達して來た。併し時代は動く。好尚は動く。動かないものは五十、六十、七十代の大歌舞伎の名題で、此の世界には時流に付れた急テンポの新陳代謝は望まれない。二十三十、四十代の少壯者は種々の意味に於ける焦慮と不安を抱いてゐる。最近劇壇に於ける色々な問題も、結局そこに根ざしたのもも尠くなかつた。

一方に於ては觀客層も倦怠を覺えた。何か變化を要求した東の者は西の物を、西の者は東の物を待ち設けた。鷹治郎、壽三郎、福助、我輩等は東の客に喜ばれ、菊五郎、吉右衛門、猿之助等は西の客の溜嚙を下けるに適した。従つて其結果から見ると、東の客も心臓で芝居を見るを喜び、西の客も頭で芝居を見るを解する有様となつた。東西俳優の融通交流は案外の効果を齎することを豫約せしめつゝある。

自分が嘉例の「顔見世號」に執筆の苛令を受けたのは「顔

見世狂言の懐ひ出」といふ過分な題目であつた。右の如き精を着たやうな論議は分外であつたが、併しこれは、吉例の顔見世狂言が現下の歌舞伎の大潮流に於て如何なる特色と重要さを持つたかといふ其の前置に過ぎない。

江戸と大阪をわかつ四條河原の此の槍舞臺に此度妍を競ふ俳優は、西の鷹治郎、福助、壽三郎、魁車の而々、東の幸四郎、左團治、勘彌の粒揃ひで、出し物も「高綱」、「勸進帳」、「石切」、「鳴神」、「枕久」、「關の扉」といふ盛澤山で觀客の食欲をそゝりつゝある。

抑も京の顔見世狂言は須く其年内既演の傑作をレギューセしむべしとか、大に新作に英氣を發揮せしむべしとか、それ〴〵然るべき注文もあるが、自分は上述の論據よりして、東西一流の俳優が同じ舞臺上に其の特技を發揮する所に顔見世狂言の意義の大半は置かれて居ると信ずる。東西俳優の藝風の特徴も此處を垺塙として灼熱するのである。こゝを井堰として決下するのである。そこには「天晴れ稀代の名劍」です。ぱりとやる意氣と、緊張と、手練が望ましい。

概して云へば、江戸の芝居は市川の荒事、時代物、大南北、默阿彌物の傳統を引き、上方の芝居は藤十郎、宗十郎等を経て現代の鷹治郎に至るまで多く世語物利事に長じてゐた。その長い傳統的特長を持つた東西の諸優が此處で晴れの顔見世に技を競ふのである。

「永遠の若さ」の持主とまた謂はれてゐる成駒屋鷹治郎は、明治六年五月道頓堀の戎座に初舞臺を踏んでより、七十二歳の今日に至るまで、舞臺生活六十年、明治十三年九月南の芝居に初出演してよりも既に五十餘年、その天成の健康と豊麗なる藝風によつて、額十郎、宗十郎、瑞寛(先代)、延三郎齋入、梅玉等のなき關西劇壇の總帥として、今以つて其の獨特の藝風を發揮しつゝ、ある。東には歌右衛門、仁左衛門、中車、梅幸、幸四郎等圓熟の優と、左團次、菊五郎、吉右衛門、勘彌、猿之助等の壯年の優が響を並べ、正に歌舞伎劇壇絶後の盛觀を呈しては居るが、例年京の顔見世に鷹治郎と顔を合せるものは、多く梅幸、幸四郎、中車等に限られ、昨年よりは勘彌、本年は珍しく左團次が參加して居る。

本來世話物役者と云はれつゝ、近年時代物にも併せ活躍して居る鷹治郎は、今以つて水も滴るばかりの前髪物をも仕こなししてゐる。治兵衛、半兵衛、伊左衛門、半七、長右衛門、貢、藤十郎などの、所謂打つてつけの和事師から、梶原、熊谷、松王、源三、政右衛門、盛綱、實盛、由良之助等の時代物乃至型物や、更に、勘平、勝頼、權八、敦盛、櫻丸、虎藏十郎、志津馬、重治郎、三浦之助等の前髪物から、若い噴演じたといふ毛谷村のお園、小春、お三輪、お輕、墨染、岩藤等の女形に至るまでを概観すると、今更乍ら其の役柄の廣さ一驚せざるを得ない。此點に於ては、さながら菊五郎と吉

右衛門の役どころを併せ有してゐる程の観が無いではない。由來天性であるべき俳優の藝風を比較品評するのは可なり困難なことであり、又場合によつては餘り意味をなさないことではある。併し、京の顔見世狂言を東西藝風交流の一觀點としたい自分は、東西俳優の特長を指摘して比較検討することとは、歌舞伎劇の傳統を眺め、現在を味ひ、將來を豫期する上に於て、實に徒勞事でないばかりか、寧ろ或程度まで頗る重要な事かと信する。

上方俳優の代表者としての鷹治郎に配するには、その藝風の範圍から云つたり或は六代目菊五郎を以つてすべきかも知れないが、此度は「石切檜原」を契機として吉右衛門(今年は急に顔見世に出演することになつたが)の一般的藝風を對比して見たい。

世話物に鍛へあけられた鷹治郎は最もよく上方の藝風を代表し、九代目團十郎の遺鉢をうけた吉右衛門は最もよく東都の藝風を代表して居ると觀ることが出来る。併し、此の兩者を較べる時は、その姿態、線、輪郭、柄、藝の情味、色彩、明暗等に於て、寧ろ對蹠的特長を帯びて居ることに先づ氣付かざるを得ない。成胸屋は世話物の畑より時代物に入り、播磨屋は寧ろ時代物の畑より世話物に入つたものと云へる。前者は細い線で福よかな姿態を包み、後者は太い線で細い骸軀を包んでゐる。前者が浮世繪式の艶麗を誇

れば、後者は南畫的の枯淡を、否更に彫刻的成型美を特長とする。一は餘裕美にすぐれ、他は緊張美に長け、一は情趣的であり、他は理智的である。一は官能的であり、他は神經的であり、一は貫祿とゆとりに長け、他は熱力と滋味に長ず。名人中村宗十郎や先代延若の感化のもとに世話物畑から出た鷹と、幸四郎や中車と共に九代目の傳統による時代物から養はれた吉と、此の大なる二つの輪は互に一半は重なり合つて、そこに相共通する藝の廣い範圍が見られる。例へば、政右衛門、盛綱、松王、源三、由良之助、熊谷、春藤、十次兵衛、重兵衛、多助——殊に此度の石切梶原などがそれであるこの外鷹には、近松物其他和事といふ不許追従の獨特なる畑があり、一方また吉にも、他を寄せつけない獨壇場がある。清正、光秀、五右衛門、仁木、樋口、貞任、長兵衛、盛遠、平右衛門、宗吾、道節、俊寛、法界坊、團七九郎兵衛、次郎左衛門、六助、元右衛門、殊に春雨傘の曉雨、權三と助十の家主六郎兵衛、風鈴蕎麥屋の又七、子供酒の泥棒等は、彼の生世話の妙味を最もよく發揮したものである。(その時々によつて出来不出来のあるのは言ふまでもない。)

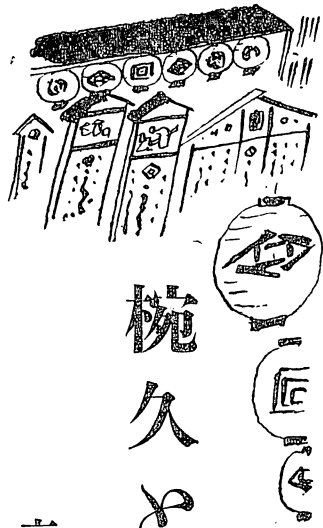
藝に凝り性であること、工夫に懸命であること、如何なる役も投けてかゝらないことは成駒屋も播磨屋も其の軌を一にする。併し、前者の工夫は多く形の上、動きの上に注がれ、後者の工夫は多く性根の上、口跡の上に注がれてゐる。鷹の

「型」は壯重ではあるが、時には誇張に陥り、うつろになり破綻を生ずる。吉の「型」は意氣と熱に満ち、迫力と緊張に富み、時に拮据に陥り氷れる炎に化する。たましひによつて人間性を活かさうとする吉の藝には、尖鋭と熱情とより來る緊張と悲壯美がある。それは謂はゞ張りきつたる弦で、その刹那々々生命の連續である。

この兩優の特徴は、「石切梶原」などに於て、名劍の刃先にこぼれる火花のやうに、最もよく明らかに、くつきりと表はれてゐる。成駒屋は中座其他では屢々演じて居るが、顔見世では、たしか大正四年以來十七年目である。その時は六郎太夫は梅玉で、大庭は巖笑であつた。此狂言は享保十五年文耕堂と長谷川千四によつて書き下された「三浦大助紅梅櫻」の三段目で、梅玉歌右衛門(芝翫)によつて大成されたものであるから、成駒屋のも恐らく其傳統を汲んだものであらう。此の兩優の型や藝風を比較して見ても、東西二様の特長をよく觀ることが出来る。

要するに顔見世狂言は東西歌舞伎の名優たちが、日比年比練りあげた其の至藝を競ふ嘉例のメッセである。たとひ出し物はお馴染みのものであらうとも、茲には一種微妙なる東西藝風との交流作用、型や仕事の醇化作用、更に歌舞の針路を暗示する轉向作用が行はれることは、大に注視するに價すること

(以下三十八頁へつゞく)



# 枕久と石切

高安吸江

また顔見世かと云へば何だか不足らしう聞えましやうが、それは年とる程益々早く過ぎ行く歳月に驚く叫聲です。既に浮世の飯時分にはもう絢爛そのもの、舞臺で「櫻眠たき造花」の美に酔はされて居た昔は夢で、今は川上の千鳥を聞いて橋畔に霜をふみながら、其日の楽しい豫想にうつゝをぬかす阿呆もなく、朝晝兼帯に祝ふお正月の雑煮と同じ心で、ゆるりと朝寝しても序幕の間にあふけふ日の顔見世。豊後縁に高綱、良寛と子守、石切と勸進帳が晝で、寺小屋に鳴神、枕久、關扉を夜に、例の如く選りぬきの出しもの、是で來ぬのはそちが悪いと云はぬばかり、新物から古典に舞踊までズラリと

この狂亂といふのは元來輕口など云て渡世とした半俗半僧の瓢箪かしくから作つたもので、それに節分の豆代りに銀の小玉で鬼は外をやつた茨木屋幸齋方の顧客玉屋庄七と、此二人を松山を戀した榎屋久右衛門に入交へて出來たのが文耕堂千四合作の元日金歳越（享保十八）です。廊の事なんか何も知らぬ堅い商家の坊々が悪友の奸計の裏をかいて、豫め當時全盛の松山太夫に頼み込んで恥辱を免れると云ふのは一寸石井常右衛門に似て居ますが、その頼み手が本人でなく母親である點がかはつて居ます。それで渡邊霞亭翁は母によつて始まり、又母によつて無事に納まるとい

並べた處、時節柄作戦計畫に苦心の程かうかどはれます。とりわけて枕久では酔つた上とは云へ、金銀の福は内、小判の豆蔲、是には流石の不景氣の鬼も立に逃げて行くことでしやう。枕久は寶永五年の末松山（海音）から緋いて七年の熊谷笠をはじめ種々として作られて居り、踊の方では二人枕久（享保十九）ひとり枕久その他いろいろありますが、此れには其狂亂が主題になつて居るのです。

ふ風に書かれましたが、是或は鷹治郎とそのお母さんとの濃情をよく呑み込んでの上で出来た趣向かも知れません。

腕久と云へば私共は齋入老人がよく演じた紫頭巾に十徳姿、阪東小三郎の美しい咽で歌はれた「三國一」のノンビリした調子を懐しう思ひますが、鷹治郎の腕久はそれでなく明治三十九年に霞亭翁が書おろしたものです。

翁はいつもサイヤ／＼とあの悠揚として迫らない態度で萬事アツサリと片付けて行きましたが、此作なんかもスラ／＼として一向肩の凝らぬもので、唯鷹治郎が無理酒をのまされて酒亂のために、懐中の官金で節分の豆蒔をする、そしてその狂態が後には慈母の愛情によつて本復するといふ経過を、彼の巧緻な技藝で思ひ存分演じ盡すのに極めて便利に出来て居ります。

酒亂や狂氣は鷹治郎が好んで用ゐるトリツクとも云ふべきであつて九十九折や進藤權右衛門などにもありますが、この腕久では誠に巧く使はれて居ます。倉屋敷の柴田定之進から無理に酒を強いられ、座を逃れやうとして果さず、懐中の官金を氣にしながら、己の酒亂に對する不安など細かい心の動搖を見せ、無理強いから脅迫になつて切迫詰つた樹酒も、始めはどこやらに恐怖の去らぬ心、後には追々酔のまはるにつれて眼ざしから顔色まで次第々々に凄味を帯び、今は全く本心を失つて二升入の大盃、一滴のこさず飲み乾したあとが、

大切な御爲替の封切、霞のやうに黄金を蔭散らす中を美しい松山の襟袖に抱き込まれては、朦朧たる醉眼もその艶姿に魅せられ、小判攫んで振上げた手は無意識に落ちてゲタリと舐れる身體の和かさ、今度は見物の方がその妙味に酔はされてしまひます。

石切梶原については今年の二月に書きましたから今回は少し控へますが、その二月の中座では星合寺の筋入堀でなく、梅玉歌右衛門（三代目）が改めたといふ八幡宮かと思はれる様な朱ぬりの堀で、第一釣枝や立木の梅と色の配合も悪く、下手に五輪塔らしいものも見えましたから寺には違ひなからうが、やはりこれはいつもの方がよかつたと思ひます。

歌右衛門の序に申しますが、本文には、此馬場先の松風を釜の沸りとく、做しての茶の湯とありますのを、酒盛にして歌を詠むことに改めたのも此人です。然し元來此れは北野大茶湯の様を見せた趣向であつたのですから、一ツ復活しても良いと思ひます。一座には大茶人の齋五郎老も居ることではあり、殊に今年は大坂城の天守閣も竣工したので、それに因んでお茶好の京都人をアツト云はすのも面白いではありませんか。

書はお茶で名刀の目利、夜は樹酒で小判の豆蒔、どうやら京の顔見世らしい氣分がするやうです。イヤトンダ愚談になりました、先づ此邊で御免を蒙りませう。

顔見世夜の部

椀久末松山

(芝居見たまゝ)

新町茨木屋座敷

座敷は大廣間にて、大床に三幅對の掛物、地袋には松の盆栽等ある。真中に柴田定之進は褥の上に座す下手には金三郎、喜之助座ぶとんを敷き對座してゐる、よろしきところに茨木屋おせい、替間豆六、同叶八が座をしめてゐる。柴田はおせいに席で名高き松山太夫の中立を頼む、おせいは外ならぬ旦那のお頼みながら、是れから先どの位お通ひなされても男嫌ひで通つた松山太夫さんゆゑ、お心にはなびいてはござんすまい、夫より根引をなされてはいかじと進む。柴田も今更引く

に引かれず、おせいに内意を頼む、おせいは委細を呑み込む。柴田は身請の金に當惑して金三郎、喜之助に金の融通を頼むが、大金の事故引當なくしては出来ぬと斷る、柴田は常日頃の出入商人の分際として、不禮なりと立腹して、此上は一應久兵衛に相談なさんと立上るを、兩人にてなだめ、その久兵衛なら今日參會へ同道致しましたが、急に但馬のお邸から久兵衛の心を見込んで、大切なものを御預けなされる御様子にて、直ぐに來いとの御使ゆへ、それへ參りかへりは雅會で落合ふ約束にて、程のうは參りますと言ふ。柴田は是れを聞いて扱ては但馬主膳が自儘の計らひ

にて殿の御用金預けたに相違ない、當分殿の御入府迄は入用なき金、暫らく此方へ借り入る事に致さう、其方等にて申入れる様と兩人に命じるところへ金三郎に案内されて久兵衛が出て來る、年越の豆蒔の御趣向をする事になり若しその趣向をせぬ物は、大きな物で酒を呑ますといふ事に成る、其蒔には茨木屋で名物樹盃を持出し箱の中より五合入、一升入、二升入と取出す。三つの樹は大ぶ酒を呑んで居ると見えて酩酊色になつて居る。樹を箱の上へ置いて五箇旬の趣向が始まる。久兵衛は大ぜいにしいられて、段々酔ふて來るを、幸ひ柴田は無理やりに久兵衛の手をとる、二升入にて呑ませる、是れにて愈久兵衛は酩酊して、豆蒔の趣向を自ら羽織を脱ぎお預りの小判の封をる。

下の巻 上町椀屋の別寮

風雅なる敷寄屋庭には、石燈籠杯ある。女中お昌、同じくおふく部屋の飾り等をして居る。隠宅付の老番頭佐兵衛は飛石傳ひ出て、封金の事をあんじ合ふては入る。番頭嘉右衛門先に、久兵衛の母およしは、女中おふくに

いざなはれて出て、細川様よりお使にて今日申に金子差出せとの、定之進の手紙を見せる



鳥浪印の  
松久兵衛

何おう大家の事なれば、金の五百兩や千兩に  
はいとひはなけれど、何を言ふにも上よりお  
預りの金、自儘に封印切つた俵お咎め受ける  
は定なれど、枕屋の家に疵付く事、さすれば  
先祖へ申譯なく、引續く俵の身持ち、不便な  
は嫁のおさんへも氣の毒と、母は嘉右衛門に  
泣き乍らに咄す。御家名に疵の付かぬ様頼ま  
んものと、其方へ向つて出て行く。母およし  
は久兵衛の身の上を案じて居る、久兵衛は許  
婚おさんと共に奥から出てくる、久兵衛は手  
に櫻の枝を持つてゐる、久兵衛は櫻にたとへ  
て自分の最期のいとま乞を言ふ、母のおよし

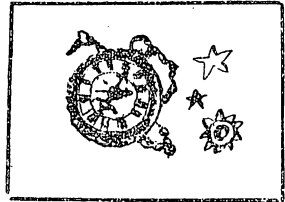
はその心を察してそれとなく教訓をして、父  
久左衛門どのが細川の殿様より拜領の朱珍織  
殿の御恩を忘れぬ様、父様の志をそむかぬ  
様にと渡し、後々の事を頼みおさんとの内祝  
言をさせんものといふを、久兵衛は町人なれ  
ども枕屋久兵衛、只小向ひの盃なりますま  
い、殊におさんにも壽徳齋どといふ親もあ  
る事ゆへ此儀はお任せ下さる様との事にて、  
母およしは佛間へは入る。久兵衛は腹中より  
手紙を出して、おさんに渡し、壽徳齋方へ使  
ひに遣るおさんは自分の離縁状とも露知らず  
いそぐとして出て行く。



秘山太夫

奥より番頭嘉右衛門はあはたしく出て封  
印切つたは私と母御が罪を引受て、名乗つ  
て出たる其場にて、定之進の手込に逢ひ、繩

にかつて引かれしは、皆あなたが心からと  
突つめていふ。元より親孝行の久兵衛故、俄  
にかはる鳥つかいにて。逆上の體となつて嘉  
右衛門を柴田と心得て話よる。  
△思案途方のその折から、知るや知らずや  
逢ひ見たさ、引舟つれて松山が来る嘉右衛門  
は久兵衛の狂氣せし事を咄す。所へ女中が出  
て、母およしは無事にて、但馬様と御一所に  
お歸りなされました。其上封印切つた罪は但  
馬の取なしにてお咎めなし、と言ひ聞かす。と  
後には壽徳齋は娘おさんを伴ひ立出て、此様  
子を聞き松山太夫は壽徳齋が身請をなし、親  
類衆と相談した上主人に咄しをなし、身の代  
金を渡し年期證文を受取たれば、長く此家に  
居る様にと、思ひあまつた詞に、松山は涙に  
くる、何かに取取りの、餘念もあらぬ遊  
び事。と久兵衛は皆々の顔を見ながら俄に母  
の傍に有る小判の包を持ち行き、フト母の  
顔を見入りし儘にて本心に歸る。柴田定之進  
は傾城松山に現を抜かし身請をなさんと悪  
計、久兵衛の亂酒を聞き知り酒をすゝめて封  
印を切らせし事發覺なして、直さまお捕へに  
なり、我君の御厚意にて久兵衛にはおかまへ  
なしとあつて、目出度家も無事に納まるとい  
ふ所で幕になりました。



# 人間創造

俳優の言葉。。。。。

成瀬無極

本誌の爲めに筆を執らうとしたとき、偶然獨逸の名優フリードリヒと、カイスラアのラヂオ放送講演「俳優」の筆記が眼についた。カイスラアは名優であると同時に學者であり、また創作家でもある。その「俳優の覚え書」二巻は頗る示唆に富んだものだと言はれる。一八七四年の生れだから、もう間も無く七十歳に手が届くのだが、この講演の調子から想像してみても、まだ頗る元氣で旺盛な表現慾に燃えてゐるやうだ。簡勁な含蓄ある言葉で俳優と劇術の本質を説くあたり光彩陸離たるものがあり定めて名放送だつたらうと思はれる。嘗て伯林の民衆劇場でハウプトマンの「鼠」の主人公に扮したときの彼の風貌が眼の前に浮び出る。彼はちみち堅實な内面的な藝術の持主である。カイスラアの講演筆記を讀んだあとでは、月並な感想や注文を書き立てるのが無意味のやうに思はれて來たので、少々狭いやり方ではあるが、この名優の言葉の二三を紹介し、あとで、

それに聊か蛇足を附け加へさせて貰ふことにしよう。彼れは先づ俳優の魂の底に宿る「憧憬」に就いて語つてゐる。それは止み難い藝術的表現慾の發動である。内に宿る生命力に「究竟的表現」を與へようとする憧憬である。自分だけがなし得る最後の唯一の表現を與へることなのだ。劇術は多くの人々が誤解してゐるやうな再生藝術ではなく立派な創造藝術なのである。その證據には、劇術に眼覺めた若い人達は屢々部屋の中で一人で泣いたり、笑つたり、狂つたりする——全然テキスタイル無しに、ひたすら内的欲求に驅られてゐる。然し、本當の演劇をする爲めにはどうしても二つのものに依拠せしめられる。これが俳優の悲劇である。二つのものとは、即ち、テキスタイルと、もう一つは頭取とである。この兩者に縛られて、彼等は屢々自分が心から表現したいものを掴むことが出来ない。他人に横取りされてしまふことがある。氣が進まない役柄に満足し



て無理に感激を生み出さなければならぬ。それにまた俳優はあらゆる藝術家の中で最も忙しい、最も體に暇の無い人間な作者にはまだしも休養の時が與へられるが、役者にはそれが無い。然し、今日の俳優の不安と焦燥とは單に體に暇が無いことからばかり来てはゐない。今日の時勢が彼等の憧憬を充たしてくれないからだ。今日の芝居が取扱ふものは殆ど悉くみな人間の集團、民族、階級の運命ばかりだ。精々、一定の階級、一定の職業の生活問題と任務とに外ならない。目下のテエマは、「群衆」であつて「人間」ではない。然し、眞の藝術の求めるものは現實であつて理論や主義原則ではない。「人間」の例證に於てのみ「人類」は生れ出る。我々は飽迄「人間」を形づくらうとする。この熾烈な憧憬はたとひ無意識的にでもすべての俳優の胸裡に宿つてゐるのであるが今日の有様では殆ど全く充たされない。それが不安と憂鬱との原因なのだ。

かくして終に堪へ切れなくなつたら、俳優の中で最も力強い人々が集まつて新しい發足點を求めらるであらう。たとひ晝夜の興行や稽古に疲れ果てゝゐても、なほ自由な時間をつくつても、新しいスタートを切るであらう。

劇場から離れて、嘗て若い純な衝動に驅られて鏡の前でひとり泣いたり笑つたりした、あの狭い汚ない部屋の中に集まつて本眞の深味のある、生命のある芝居を演じるであらう——人間を心臓とする芝居を！ 全く職業意識を離れ、興行とは没交渉

に！ かうして劇術は復活するのだ。さうなると、劇場がこの更生した一座を新しいセンセエションとして招聘するかも知れない。それは兎も角、かくして劇術は再び「人間」を、そして同時にその甚深な喜びを發見したことになるのだ。——

カイストラの言葉は寧ろ新しい劇團と新しい俳優とに向つて語られてゐるやうだ。日本で例を取つて云ふと、小山内氏の自由劇場や樂地小劇場時代への復歸を意味することにもなりさうだ。あの時分は「人間」が演ぜられた、今日では「階級」が「群衆」が舞臺の上に動いてゐる。以前には「俳優」が中心だつたが、今日では「機械」が支配してゐる。「訓練」が「劇術」に取つて代つた。人造人間の地位に置かれた俳優が煩悶するのは無理も無い。

然し、歌舞伎役者は全然立場を異にしてゐる。こゝでは依然俳優が中心となつてゐる。見物者は役者を見に来るのだ。役者の藝に憧れて來るのだ。その一顰一笑に牽かれてゐるのだ。歌舞伎役者は時勢を超越した幸福者である。若し煩悶がありとすれば、それは歌舞伎そのものの、運命に關することだ。演劇に於ける俳優の位置に係はるものではない。高々物質上の苦勞で精神的のそれではない筈だ。たとひ貧乏はしても彼等は舞臺上の王者なのである。従て、彼等が直面する危険は籠兒や人氣者の直面するそれであつて、繼つ子や日蔭者の遭遇するものではない。安易に墮し、常套に流れ、慣用手段を繰返して、カイストラの

所謂「究竟的表演」へまで精進することを怠る點に致命的疾患が潜んでゐるのだ。洗練されたけれんや表面的技巧を用ゐて無邪氣な見物の喝采を博したところで、それが何になるであらうか。一日の演戲が終つて、衣装を脱ぎ粉飾を落して、生地自分にかへつたとき、果して憧憬を充たしたあとの靜かな満足が感ぜられるであらうか。省て窺かに恥ぢるところはないだらうか、云ひ知れない淋しさに襲はれはしないだらうか。自分の持つてゐる究竟のもの、最後のもの、他人には決して眞似の出来ないものを十分に出し切つたといふ自覺が得られるだらうか。それが得られないうちは、何百回同じものを繰返してみても、魂の生長は求められない技藝の發達は望めないのだ。およそ藝術に「繰返」しといふことはあり得ない。その度毎に新らしい創造が行はねばならない。この場合停滞は即ち退歩である。一個の「人間」を新に生かし切つた喜び、それは恐らく俳優のみが完全に味ひうるものであらう。何となれば、俳優の藝は靈肉を傾倒した全身的表現だからである。自分の姿に似せて人間の像を刻んだプロメトイスは肝臓を猛鳥に啄はまれる苦惱を嘗めた。およそ惱の無いところに眞の喜びは無い。

新しい努力と内外の苦惱に堪へる勇氣を奮ひ起さないかぎり、歌舞伎は先づ内部から崩壊するであらう。

嘗て劇壇の新人と呼ばれた左團次丈に寄せる言葉としては釋迦に説法の譏を免れないかも知れないが、これは歌舞伎役者、

否、俳優一般に對する警告なのである。

京都市木屋町松原下ル

明文堂印刷所

電下四八五番

純白固煉



新發賣

# 御園チタム白粉

▼驚異的

## 新化粧美!

正價 金五十錢

■ 艶麗な濃化粧に ……

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切ったお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に ……

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に ……

くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!

# 鳴神と

## 安永の黄表紙

尾崎久彌



「鳴神」は、近代的に見ても、面白い芝居である。包合せられてゐるものを、分り易くいへば、政治に對して宗教の反對、その反對ぶつた宗教が、時の間に、政治の意志を承けた「人間」のために敗北、政治は萬々歳といふので、が面白いの骨子は、この宗教が、如何に「人間」のために敗北するかにある。超凡的な偉力を有する宗教が、下々の「人間」のため、最も平凡に敗北させられる。そのあはれさが、喜劇味もあり、悲劇味もある。

「鳴神」が、獨立して生れるに至つた年代、その出處などは「歌舞伎細見」などに據つて分る。今更冗く謂ふ必要はなからう。私は、この「鳴神」が、後世の江戸の稗史に、如何に採り入れられたかを、此の機會に

述べてみたい。「鳴神」を女にしたものは「女鳴神」である。この「女鳴神」物も、稗史の上に脱胎したものは多い。が今は、本来の「鳴神」だけに止める。末期の草雙紙類即ち合巻を見れば、幾らもあらうが、こゝに一つ、最も面白い、換骨脱胎の妙なるものがある。それは、江戸稗史の一體、草雙紙なる總括的名稱に入るが、部分的には、安永四年頃より文化の初めに流行つた「黄表紙」と名づける、その中の一部である。文學史的記述ではないから、此の「黄表紙」の説明も、省いておく。とにかく、繪七分文三分の小説の一派で漸く大人の讀物と進歩しつゝあつた、草雙紙の或る時期のものである。

「鳴神」を採り取れて面白いといふ黄表紙は、黄表紙も最初期の方の、安永六年版「風流友世車」東西南北作、鳥居清經畫といふもの、上下二巻、計十枚の短篇である。安永五年、越後から來た友世といふ大女の力持があつた、江戸の堺町新道へ、あらたに小芝居をしつらへ、そこで見世物にした。力持の技は色々あつたが、大八車の上に米數俵を積み、それを片手で差上げたといふ。この黄表紙の外題は、これから來てゐる。それを「鳴神」にどう結びつけたか。丁度、その年（安永五年）三月末より秋の初めまで、江戸では癩疹



が流行し、人多く死んだ。これは「武江年表」にも載つてゐる。その癩疹の流行に結びつけた。即ち、癩疹の病毒を、擬人化し、南蠻から来た悪魔の癩疹道人といふもの、業だとし、その癩疹道人が、「鳴神」と同じ役をする譯である。さうして「鳴神」の場面を探り入れたのは、この作の下巻である。

この作では、友世を大阪下としてゐる。此女、以前は喜瀬川（この喜瀬川は、實説友世の藝名柳川ともよの柳川をもちつてゐるよう）といふ遊女だつたのが、今度友世と改名して、女力業を見世物にする。その堺町の小屋は、いつも満員の好人氣。その棧敷へ、當時江戸市中に癩疹を流行らしてゐた癩疹道人が見に来てゐて、友世の美貌と力業に見惚れる。次は、餘分に網ひ混ぜた白木屋お駒の話で、お駒は、入婿喜藏を毒害した罪で、既に刑罪に及べんとするのを、奉行の情で、一つの功を立てたらば、その罪を宥めんとあるその功とは、癩疹道人の術を破り、人々を助くるならばとある。「蠻國より癩疹道人といふ者渡つて人壽を絶たんとするがゆゑに、世に癩疹はやつて大人小兒とも難義に及べり。此の癩疹が術を破るものならば」である。つまり「鳴神」の絶間の前の役は、この作では、斷罪に迫つたお駒である。次は、白木屋庄兵衛の宅で

力持の友世が、庄兵衛方を訪れて、嘗て友世が喜瀬川の時代、馴染んだのは、お駒の戀人の才三郎であり、そのお駒とは、異腹の姉妹と分る。妹のお駒を助けるため、友世も癩疹道人退治に加勢をすることになる。次が癩疹道人の住家の場で、こゝが「鳴神」の場面。お駒、首尾よく、道人が世界の人壽を締め轉じた茶壺を覆がへす。道人、大荒れの所へ、才三郎が牛頭天王の御札を高札に仕立て、助けに来る。次ぎは目出度しで、お駒は本妻、友世はお部屋様となり、才三郎は歸參と云ふのである。

つまり此の作は、お駒才三を作中の主要人物とし、（これも、安永五年春、中村座で大當りを取つた「戀娘昔八丈」菊之壺、三五郎等の芝居にかけてゐるよう現にこの作の挿繪で、お駒は、三代目菊之壺の似顔である。）それに安永五年最大のニュースだつたともよの力持と、癩疹の流行とを結びつけたもの。その癩疹退散、お駒助命に、この「鳴神」が應用せられた。

「鳴神」と對照するため、この作の「鳴神」の場面を紹介してみよう。やはり、二人の弟子を従へてゐる。挿繪は奇抜で、道人は、芝居の鳴神同様であるが、弟子は、南蠻人の風俗である。

「それ山は動かずして法性の色體を現はし、水は止ま



らすして遠達の深徳を見する。癩疹道人は、喜瀬川が色香に迷ひ執著忘れ難く、一たび喜瀬川と枕をかはさんと、第六天の魔王へ誓ひ、一萬人の lifespan を絶たんと才三がもとより奪ひし萬古燒の壺へ人の壽命を封じ込め、此のばくれん山に引籠つて幻術を行ひける。白木屋お駒は、命助かる嬉しさに、獨り嶮岨山道を厭ひなく、ばくれん山の瀧壺へ辿りつけは、癩疹道人を始め二人の弟子ねつうん、うみうん、女の來るまじき所へ來るは、怪しとて、大きに咎めける。「あい、みづからは、遙かお、いの麓の者でござりますが、語るにつけて懐しや、みづからは、夫に別れましたものでござんすわいの。その時の歌は、名もあらず見もせぬ人の戀しきは、ア、何とやらといふ下の句でござんしたわいの。」

癩疹道人は、お駒の顔を見れば見る程、戀しと思ふ喜瀬川に生寫しなれば、氣を奪はれ、壇上より見惚れてゐる。「あやなやけふやながめくらさんといふ下の句ではなかつたか。女、して〜どうぢや〜」。癩疹道人は、お駒が才三に馴れそめの話に聞き惚れて、壇上より浮かれ落ちて目を廻せしを、お駒が口うつしの水にて正氣になる。

「ねつうん」それを忘れるといふ事があるものか。」

「うみうん」板にでも書きつけて、腰につけて歩いたがよい。」

癩疹道人は、お駒が口うつしに水を飲ませしと聞き大きに怒りをなし、一角仙人の故事をいひて、わが行法の破れん事を厭ひ、お駒を引割き棄てんと罵りしがお駒が心底を聞き、且は形の喜瀬川に似たるに心浮かれて、弟子のねつうんが隠しおいたる酒を取り出し、妹背の杯事とて、色々に勧められて大酒を過し酔ひ臥しける。「駒」そりや聞えませぬ癩疹さん。」お駒は思ひの儘に色を以て癩疹道人に大酒を勧め、酔ひ臥したる暇を窺ひ、瀧壺へ攀ぢ登り、人の壽命を封じ込めたる壺の口を開き、七五三繩を切つて立去るとひとしく震動雷電、雨風頻りに車軸を流す。これにて兩人の弟子駆けつけ、道人を呼び起すに、心づいて見れば、第六天の七五三繩も切り、人壽壺も打ち返してあれば、大きに驚き、今の女が爲す業也と、大きに荒れる。かゝる所へ尾花才三郎駆け來り、荒れに荒れたる癩疹道人に、牛頭天王の御札を差しつければ、さしもの癩疹此の神力に恐れ、許させ給へ牛頭天王と目くるめいて倒ると見えしが、忽ち一團の光物となつて、南の方へ飛び去りける。それより世上に癩疹を患ふ貴賤上下眼のあたり平癒して、壽命長久なりと、大きに喜びあ



鳴 歌 舞 八 十  
 伎 内 舞 番 八 十  
 神

石 む ほ お

鳴 成程そなたの事ぢや  
 た アイ自らは遙か此の御山の麓  
 のもの夫に別れました女でござ  
 りまする  
 鳴 夫に別れたか  
 た アイ  
 泣く。  
 鳴 フウ生き別れか死別れか  
 た しかも今日が丁度七七日  
 鳴 四十九日か  
 た アイ  
 南無阿彌陀佛  
 鳴 籠こらう今は仇なれこれなくば  
 忘るゝ事もあらまじきものを新  
 しき此薄衣浮世の垢を雪がんと  
 存じますれば如何なる事にや百  
 日あまり早して雨が降らぬか井  
 の水とても潤き果て單衣を洗濯  
 いたしませうにも水がござりま

せぬ、承はればこの御山の瀧  
 の瀬はかゝる早にも水絶えず清  
 く流るゝ名水ぢやと申すよつ  
 て女子の身の踏み馴ぬ山路を登  
 り衣を洗ひに参りました。床し  
 きは夫懐しきか良人自らが心の  
 中を御推量なされて下されませ  
 いなア  
 泣く。  
 鳴 偕てく哀れな物語り、見れ  
 ば若い身空できつと貞婦の操を  
 立て夫の筐を洗濯せんと峻吐を  
 厭はずよち登つたる志はハテ  
 感涙至極ぢやなア、夫程の詔ら  
 いならば添ひ連れた頃は太う仲  
 がよかつたと見える  
 た 仲のよい段かいなア、天にあ  
 らば比翼の鳥、地にあらば連理  
 の枝と云ひ交したる來し方を思

ひ出せばおもしろい事でござり  
 ました  
 鳴 煩惱即菩薩婦人に對して斯く  
 詞を交する因縁後生の回向その  
 話しが聞きたいものぢや  
 た お話し申して心の愛さを暗ら  
 したうござります。何んとお話  
 し申しませうかへ  
 鳴 そりやよからうくサ話しや  
 た サア話しまするが其處と此處  
 とは遙か隔たつて居りまする。  
 依つてお話し申したらお耳に入  
 るまいし、高う申したら山彦に  
 答へて斐じうござりませう、ど  
 うぞお側へよつて近うお話し申  
 したいものでござりますがお側  
 へは行かれず  
 些とも大事な其處で話して  
 ハ瀧の音に紛れて……

へり。  
 (ねつうん)「南無三」。牛頭大王では堪らぬく。  
 それ逃けろく。「うみうん」「おらが師匠は、はくゑ  
 んといふ身だ。」

以上であるが、はくゑんは、白猿であつて、五代目  
 團十郎をきかした事、謂ふ迄もない。  
 (十一月二十二日正午)



# 顔見世に

中村 鴈治郎

まわり年の

京都の御見物衆が、年中行事の顔見世が近づくこと、初日の蓋開きを指折りかぞへて待ちこがれてゐられることは、毎年私どもも耳へ聴かされることでおますが、我々幕内の者も別して私達は皆様と同じやうに、恰ど子供の時分にお祭りを待つやうに、其日の来るのを待ちこがれます。まつたく、こればかりは、幾歳になつてもかはらぬ、なつかしい心持でおます、歳のことを申せばお恥かしい次第ですが、来る初春には私も七十三歳といふので恰ど申のまはり歳に當りますので、一層意味の深い顔見世のやうな気がいたします。

◇ もう永い年月、毎年く同じやうに出勤さして頂けるのは、

まことに有難いことで、私としましては、京都は第二の故郷も当然、二十歳頃の少年時代に、京極の道場の芝居で修業をさして貰ひ、身にあまる御最辰を受けて、其後五十餘年の久しい間相も變らず、鴈治郎々々と呼んで頂けることを思ふと、顔見世の芝居ばかりは、いつまで経つても、昔ながらの思ひ出で、心はいつばいになります。とりわけ今秋は、いつもの大阪の盆替り興行を松竹の都合で止めて、東京へ出勤いたしましたので、京阪の皆様へは、すっかり御無沙汰をしましてしまひました、まことに申譯の無いこと、思つて居りますので、今度京都へ歸りまして上は大阪の皆様へお詫かたぐ、今度は二重三重に働いてお目にかけるつもりで、唯今からは勇んで居ります。



さて、狂言のことで、ちよつと前もつてお断りを申して置かねばならぬことがおます。

私の演し物が「石切梶原」と「梶久」でおますが、どれも顔見世では久しぶりの狂言でおます。石切の方にはとりわけ申し上けることはございませぬが、梶久の方では、今度すこし心にかゝります箇所がおますので、それを訂正して、古い狂言ながら又別の味はひで見て頂けるかも知れないと思ふて手入れをいたしました。

大體のところ、現在までは序の新町九軒の場で、柴田定之進や友人達に悪強いされて私の梶久が茨木屋へ揚る段どりになつて居りましたが萬事當今ではくだくしい處は捨て、要領に入るのがよいといふスピードでおましたかいな、そのスピード式で行くことになり、序幕は止めて、すぐに茨木屋の座敷から、芝居を始めることに改めました。勿論筋道には變つたことはございませぬ。

それからモウ一つは重要なことで、以前のまでおますと、大詰で梶久が松山を見てケロリと酒亂が癒ることになつて居りますが、如何にお芝居とは云ひながら一旦發狂したもののが、僅かな時間の間に癒つて目出度しくはあまりにお話へ向きで、じやらくして居りますので、今度は一切は解決して目出度くなつてはるるが、梶久の氣狂ひは、癒るといふ未來を豫想して

其場では兎も角狂氣のまゝで幕にすることに改めました。また隨所に此場では改訂を加へましたが、悪いところは、どしどしお叱りを頂きまして、御見物のほどを唯今から、お願ひ申して置きます。

かう申すもの、唯今は歌舞伎座の開演中で、序幕の忠臣藏の鶴ヶ岡が開きますまでの間、稽古をいたして居りますやうな次第で、何處が仕うとハッキリしたことは申上けられませんが、稽古の進むのに連れて、いろく考へも出来ておりますし、京都の舞臺稽古までには完全に出て来がります筈で、それまでは悉しいお話は申上け兼ねます。とは云ふもの、此話が皆様のお目にとまる頃にはモウ京都で開演いたして居る時分と思ひますから、どうぞ前々から、かうして稽古をしてゐたものといふことをお認めがひまして、相變らず、御尊覽のほどを御願ひ申します。

何か昔の顔見世の思ひ出をお話せよとの編輯部からの注文でおました、私どもの勝手を申せば数かぎりも無いこと、そんなことをぐづぐづと申して見たところで、皆様の御興味にもなるまいと考へまして、以上のやうなことを申上けて御挨拶に代へたいとぞんじます。

(十一月二十日、東京歌舞伎座の樂屋にて)

# 古例顔見世の今昔

大川 澱 江

今年ももう顔見世月です。全く早いものです。北山時雨に鳴り渡る櫓太鼓、いゝものですね。あれを聞き、四條橋畔にはためく旗幟を見ると京都は既に春色です。それは京都ばかりぢやない。歌舞伎王國の春です。京大阪と年中歌舞伎劇に奔走する私達も、顔見世気分はまた別です。全くいゝものです。

此頃でも午前十時開幕といふと不思議な程早い氣がしますが、昔は午前四時頃から開いたもんです。

顔見世や一番太鼓二番鶏

いゝことを言つたもので、大序がすんで一段目の幕切で「も早や鶏鳴！」とせりふがある頃に、場外は東天紅で鶏がコケコッコと鳴いたもんです。だが早く始まると共に早く終つたもので、まづ遅くて午後八時ですか、これは蠟燭とか、瓦斯とかで所謂舞臺照明が自由でなかつた故もあるのですな。

だが、記録では顔見世芝居の一番太鼓は午前二時に打つたもので、三

顔見世〔畫の部〕

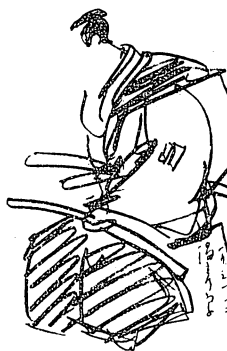
## 梶原平三試名劍

おほむ石

梶原 オ、實に尤も、梶原が手の内に名作の證據を見せん、ハテ何にをがな

透り見廻し手水鉢に目をつけ  
ム、幸ひ

鷹次郎・梶原平三



いざと二人の手を取つてこなたの日影に向はせ

梶原は二人の手をとつて手水鉢に向はせる、二人のかげのうつりし思入れする

あれ見よ、兩人親子の姿ありくと、うつ

◇ 出 思 の 世 見 顔 ◇

寶に御酒その他を飾り二番鶏の鳴く午前四時から見物を呼入れ午前六時から翁渡し(式三番)が始まつたものです。それで遊里でも年中行事のひとつとして藝妓達は前夜の十二時頃から入場して、四條西の矢尾政などから蠣雑炊や蠣飯を取寄せて三味線弾いての大騒ぎで、一番太鼓で一旦劇場を出て常着を改め厚化粧模様の紋付晴れやかに練込んだ頃もあつたさうです。

だから幕内でも滑稽な話が多い。「小栗判官」の大序で馬の議論がある。観客は來てゐないし、エラ形の俳優はまだ樂屋入りもしてない。そこで馬の後足がなくて前足だけで立つてゐるのに對して、揚子を啣へた俳優が十分間ばかり譯のわからぬことを喋つてチョン、それからその俳優は蒲團を被つて寝るといつたナンセンスなこともありましたよ。そう斯うしてゐる中に俳優が揃ふ譯です。だがそうした所謂半ふしやう……これは半不精をしようといふ譯でなく、半分しやうといふことになるのですが、その時でもチョンといふ朴の打方だけは喧ましく言はれたものです。粗雑にやると怒りましたよ。

由來顔見世興行は十一月中旬に初日を開けてゐます。松竹合名社と中村鴈治郎の握手は明治三十七年十二月廿七日から三日間京極の歌舞伎座へ出演したのが始めて、この三十七年の顔見世中異色のある狂言は時節柄の戦争劇です。兄は豫備兵、妻は露探」といふ角書があつて「召集令」四幕、鴈治郎の車夫大澤國彦、玉七が車夫菊造、成太郎が桐山少佐、傳五郎の父止兵衛、吉三郎が芦津路雄に扮した歌舞伎俳優の現代劇で、これを打上げての直後が、前述の松竹と鴈治郎の握手となるのです。

リし影はニツ洞、刀の切れ味これを見よ  
 二人を寫す影ぼうし、厚さ尺餘の御影  
 石、丁と打てばどつきりと  
 梶原は件の劍にて手水鉢を切る、仕  
 掛けにて手水鉢はニツに割れる  
 楢  
 アレ申し父さん  
 梶原 劍も劍



六郎 斬り人も斬て人  
 メリヤスにて三人感する體  
 〽さてこそ源氏一流の御世に秀てし梶原  
 平三、鎌倉殿の政務の沙汰  
 梶原 萬事に下知をなすならば  
 〽下知くと言ひほどせば誠は武士の鏡  
 とも、世に輝きし男なり  
 六郎 今こそ誠の名作と、奇特あらはす此の  
 劍、差し上げ申すも身の大慶、

明治廿九年十二月、これは記憶すべき年で、南座が松竹の手へ這入つた第一回興行でもあれば、また今日京都の十二月が顔見世と稱して東西の名優が華々しく出場をするやうになつた第一回興行とも言へるのです。「三番叟」「後藤懺政」「安達原三段目」「太平記喜内住家」「戀飛脚の井筒屋」「だんまり」「雪月花」の七狂言に、俳優は雁治郎、右團治、福助、巖笑、延三郎、政治郎、延二郎、璃珪、珊瑚郎といった顔振れで、長唄は音藏、三味線には今の寒玉、伊十郎、勘五郎が出てゐました。この時は書の部午前八時、夜の部午後五時の開幕でした。

爾來三十年、顔見世は冬枯れの京の賑ひばかりでなく、歌舞伎王國の精華であり誇示であります。今年も雁治郎、左團治、吉右衛門、幸四郎の大一座で大阪ではもとより東京でもいまだ顔合せのない舞臺が展開されるのですから、定めて好劇家の満足を購ふのは勿論京阪神の観客は京都へ！ 南座へ！ と殺倒されるだらうと思つてゐます。

## 下駄と合住居

中 村 魁 車

顔見世の思出……。随分色々な事がある。突然に思出など、云はれる

顔見世〔畫の部〕

## 佐々木高綱

おほむ石

高綱（苦笑ひして）いや、これはお聞きせ申しても説ないことや、先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞きくださいぬか。今日同向を頼みまゐらす佛と申すは、わが身寄りでも無し、敵でもなし、味方でも無し、罪なくして相果てたる紀之介といふ馬士でござる。

佐々木の高綱



高綱は眉を皺めて、空をあふぎつゝ起つて徘徊す。智山は珠数を爪繰りながら聴く。麻のかけより子之介忍び出で、おなじく聴く。

高綱（しばらくして）かぞふれば十年以前、

◇ 出 思 の 世 見 顔 ◇

と、何から話していゝのか、却つて話しくゝなる。

むかし——さあ明治廿七八年から三十年ごろまでと思つて頂けば間違ひはない。なにしろ、顔見世と言へば朝の早いのが名物で、お客様は前の晩から寄せかけるといふやうなわけで、開幕は大い朝の七時。入込みには、「大入」と書いた入口の行燈を破つてからお客を入場させてゐたなどは顔見世の思出のなかでもなつかしいもの、一つだ。

幹部連は二幕目からでなくては、出なかつた、だから序幕はまづ中どころ以下で、お茶をにごしてゐたが、七時の開幕に間に合ふやうに仕様と思ふと、遅くも六時には樂屋入りをしなくてはならない、六時の樂屋入だと、五時には床を離れなくてはならない。

夜は八時から九時には、芝居は終るが、その時分、大い女氣がついて廻る時代で、芝居が閉場て、お客先の勤めをすましたり、女の許へ行つたりすると、大低夜どほしで、寝る時間などちつともなくなる、晝間など、舞臺に出ない間は、白粉も落さずそのまゝ、樂屋で眠る、その間に食事もしなくてはならない。

睡眠は不足、食事時間不定、女には接する機会が多いといふわけで顔見世に行くと、若い俳優は健康を害すといふ、今から思へば、不思議な様だが事實はその通りだつた。

こんなわけで、その當時は、下廻りは殆んど樂屋泊りで、ちよつとした看板になると、決して宿へは行かなかつた、宿へ行くくと人氣が悪くな

治承四年の秋のはじめ、蛭ヶ小島に於て顔朝が旗をあぐるといふ噂、ひそかに都へもきこえたれば、われ真先に見参に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人の悲しきには馬も有たず徒歩にておぼつかなくも迎りて、八月二日のあかつきに野州の河原にさしかゝると、まだ明けやらぬ朝霧のあひだより、雑鞍置いたる馬を追ふて來る者のござつた。これ幸ひとよび止めて馬



を借受け、むかふの岸までは渡りしが……これより遠き旅を行くに、馬の足を借らでは不便なり、ぬすみて逃んと馬をはやめて二三町ばかり駆けぬければ、馬士はおどろき追ひ來りて馬盗人よと罵りさわぐ。かくて是非も無し、馬をかへさば大事の間に合ふまじ……とこゝろを鬼にして……。

◇ 出 思 の 世 見 顔 ◇

ると云つて居た、といふのは樂屋泊りでも、ヒイキ先から蒲團から食べる物まで運んで来て呉れた。だから宿をとる様になれば、ヒイキのうちへ行つて寢泊りをする、京都のヒイキはそれが一年中の樂しみの一つであり、俳優としても、こうしたヒイキが澤山あるのが、勿論外聞のい、わけで、わざ／＼宿をとると、人氣のないものと見られたものだ。ヒイキ先の宿で、思ひ出したが——京極の下駄屋に半月を送つた事があつた。

若い美しい(自分の事を美しいといふのも變だが、その頃は美しいと皆さう云つてゐた)僕が寢起をしてゐると、女下駄がとてもよく賣れると云つて大へん大事にして貰つた事があつた。

大事にはして貰つたが、寢るのが、その家の二階で、荒けづりの下駄や、まだ、下駄にならない材木の小さく切つたやつなど、合住居は、實に變てこなものだつた。

今でも顔見世を思ふと、この下駄と合住居をした思出が、フツと心に浮んで来る。

(第五頁より續く)

五兵衛にも彼は獨創のエロチックな描寫を示して成功してゐる。のみならず、「鳴神」のエロチシズムは他の追隨を許さぬジリツヒな至藝を見せてゐる。まつたく色氣のなささうな左團次に、この色氣があるとは驚異すべきことだ。或人が彼に「あなたはどんな芝居をやりたいと思ひます」と尋ねると、「私は紙治を一度やつてみたい」と答へたと、むかし傳聞したが、これは決して冗談に言つたのではなからう。

險保車動自・害傷・送運・災火・上海

# 災火上海正大

岡福・戸神・阪大・京東

他 具 産 物 井 三 店 理 代

## 營業のおしらせ

- △三菱封筒、相生封筒の特約販賣、横封及立封とも
- △スタンダード宛名印刷器及宛名カードの特約販賣
- △封筒、帯封等の宛名上書、と各種書類の淨書
- △御得意名簿の調査作成と、其整理
- △會社并に商店の記帳と、計算事務の補助員派出
- △美術謄寫版印刷の引受
- △型録、商標、パンフレット編輯及發行の一切事務
- △其他反響ある廣告印刷物の作成と生きた宣傳の創案

## 公 盛 社

京都市下枳殼馬場河原町西入

電話 下三九四六番

土木建築設計請負

## 白波瀨工務店

京都市中京區仲通り竹屋町上末丸町

電 上 ③ 四 二 八 八 番

# 鳴神

森 ぼ

- A あなたが高嶋屋一座の出し物としては、「修禪寺物語」や「鳥邊山心中」よりも、「毛抜」か「鳴神」を見たいといつてられました。その「鳴神」が今度の顔見世に出ることになりましたね。
- B 私の宿望が叶つたわけですよ。元來あゝいふ大味な、それで何處かシツカリしたものを掴んで。芝居が私はどうも好きなんです……。
- A 僕はその「鳴神」も「毛抜」も知らないんです。やはり「暫」とか「矢ノ根」とかいつた風の物なのでせうか。
- B 同じ歌舞伎十八番の中でも、「鳴神」や「毛抜」は單純な荒事ではないんで、形式は大時代、大昔でも、内容は近代的なものを持つてゐます。それが左團次君の趣味と一致したので進んで復活する氣にもなつたのでせう。
- A 僕は前にあなたから「鳴神」の事を一寸聴きました。もう一度改めて伺つておきたいと思ひます。
- B 筋は單純です。まづ昔々、時の天子は皇子の無いのを歎かれて、鳴神上人に皇子降誕の祈禱を命じられる。若し皇子誕生の時は、その報酬に戒壇を築く事を許す約束をされました。上人が不動明王に祈請を籠めると、靈驗いやちこで、皇子の御誕生があつたが、天子からは戒壇の御沙汰も無い。それを怒つた上人は雨を降らさぬやうにして民百姓を困らせたなら、天子も御心を翻されるであらうと思つたので、不動明王に祈つて、龍神を滿壺の中に封じ込めてしまひます。人民が旱魃に苦しむので、天子は洛中無双の美女、絶間姫に命じて上人を色仕掛で墮落させ、行力を破らうと計る。と、これが計畫通り行つて、上人は墮落し、行法は破れる。失意と失戀から狂氣のやうに怒つた上人は、雲を起し風を呼んで、生きながら雷となり、逃げる姫を世界の果まで追ひ驅ける——ので幕といふわけで、傳説的なものです。
- A 全體が荒彫りの感じで、とてもいいものです。何かさういつた傳説でもあるのでせうか。
- B 出所は印度神話で、佛典から今昔物語、太平記等に記載され、それが謡曲作者の材料となつて「一角仙人」といふ曲が出来たものらしく、その「一角仙人」から芝居の「鳴神」は生れたのでせう。



# 問 答

の ほ

A すると、内容は同じものなのですかね。

B 先づ同じですが、戒壇建立違約の件は、頼豪阿闍梨や志賀寺上人の話を持ち込んだので、一角仙人の傳説は、鳴神自身の臺詞の中にも述べてあつて、それとなくネタを明かしてゐます。

A 能の「一角仙人」は面白いものなのですかしら……。

B 私も未だ観たことが無いんですがね。曲は各流にありますが、餘り上演されないやうです。それだけ面白く無いのではないでせうか。新しい梅若流では除いてしまつたとか聞きました。

A 芝居の方では、度々上演されたものなのですか。

B 古劇としてはまあ上演されてゐる方であつて、記録で見ると、二代目團十郎が初代菊五郎の絶間姫で寛保二年一月、大阪佐渡島座で演じて以來、三、四、五、七、といふやうに八代目の團十郎まで十數回演ぜられてゐます。その後は打絶えてゐました。

A 左團次氏も、もう幾度も手掛けてゐるのでせうね。

B 今度の南座で四度目です。最初は明治四十三年五月の明治座で、此時は絶間姫が故人澤村宗之助、弟子の坊主は左升、壽美藏でした。次が大正八年十二月の帝劇で、此時も絶間はやはり宗之助、弟子の坊主は猿之助、壽美藏で、この二人の坊主で一層シバキを面白いものになりました。三度目は震災後で、大正十五年の正月、歌舞伎座です。絶間は松蔭、弟子の坊主は左升、荒次郎でした。私は幸ひ、三度とも見物してゐます。

A 左團次が初演の時、つまり復活させた時には、昔の臺本があつたのですか。

B え、今申した二代目團十郎の時の正本を土臺にして、それに七代目、八代目の時のを参照して、新に臺本を作り上げたのださうで、アレインデしたのは岡鬼太郎氏といふことです。併し、演出に就いての記録は無かつたのでせうから、あれまでに纏めるには、かなり工夫を凝らしたのだらうと思ひます。

A 舞臺では何處が面白いのですか。

B サアやつぱり、鳴神が墮落する前後でせうね。一角仙人の故事を知つてゐる上人が、その故事と照合して、女をスパイではないかと疑ひながらも、段々チャアムされて行くのが面白いと思ひますよ。先づ女のローマンスに聞き惚れ

# 「ギブス煉固歯磨」

本品を使用すれば幼時より老年に至る迄歯牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉固歯磨は刷子がととくかぬ微細な間隙へ侵入して常に歯を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身体の健康を計るのでありますから毎日二回必ずギブス煉固歯磨を御用ひ遊ばせ、さすれば気分は爽快になられます。本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります。有名な百貨店、薬店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢

大形中味 壹個 金六拾錢

小形 壹個 金四拾五錢

ロンドン パリス デイ・エンド・ダブリュー  
日本代理店 株式會社

ギブス株式會社  
横山商店  
東區豊後町三番地

壇上から轉けるのも奇抜だが、女の癢を押へるので始めて肉體に觸れて、俄に性の眼覺めるのも自然で、現代の達人にもピタリと來ると思ひます。

A 何んだかシバキが早く見たくなりました。寛保、寶曆頃

にそんな好い作があつたのですかねえ。  
B それが面白いのは、二代目團十郎の演つた「雷神不動北山櫻」といふのは、初代才手のした鳴神の荒事や、不動の化身事、毛拔の條等を寄せ集めたものだつたのですが、それが再び、鳴神、不動、毛拔といふやうに、言はゞ三部曲

の形に別々になつてしまつたのです。

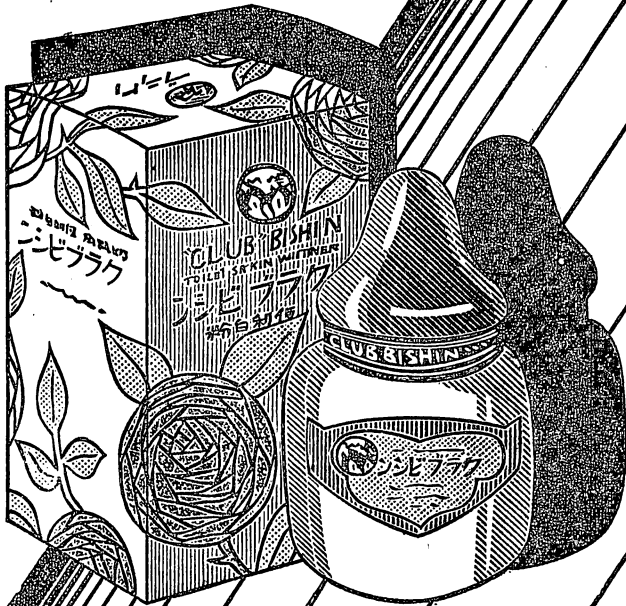
A それでは十八番の中、三つが一つ芝居に含まれてゐたわけですね。

B さうなんですよ。委しい事はまたお話しませう。後には鳴神を形でゆく「女鳴神」なども出來たので、そんな事も、その時にゆつくり話させよう。

A 大層豫備智識が出來まして有難うございます。これで芝居が一層面白く見られることと思ひます。

さし美さしは麗のこ

# ソビブラク



白色・肌色 正價三十錢

新發賣の  
布袋入

# 粉洗イテカ、ブラク



# 京の顔見世

入江來布

顔見世の霜に立つたるひとりかな  
佐々木高綱

顔見世切梶原紅梅白梅に  
石切梶原

手顔見世にわれも唄はぬ手て  
毬うたきければ春なる顔見世や  
唄うたきければ春なる顔見世や

顔見世やいよく霜をうちかさね  
鳴やいよく霜をうちかさね

顔見世の顔見世のなかに梶屋かな  
顔見世の顔見世のなかに梶屋かな  
顔見世の顔見世のなかに梶屋かな



顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>	顔 <small>かほ</small>
見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>
世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>	世 <small>よ</small>
へ	を	の	や	へ	や	に	や	四	や	京 <small>きやう</small>	に	は	や	雑	關
東 <small>ひがし</small>	繩 <small>なは</small>	の	幕 <small>まく</small>	淀 <small>よど</small>	五	鴨 <small>かも</small>	川 <small>かは</small>	條 <small>ぢやう</small>	大 <small>おほ</small>	の	髻 <small>まげ</small>	霜 <small>しも</small>	あ	く	の
山 <small>ま</small>	手 <small>て</small>	灯 <small>ひ</small>	燎 <small>せう</small>	橋 <small>はし</small>	條 <small>ぢやう</small>	千 <small>ち</small>	流 <small>なが</small>	の	坂 <small>さか</small>	人 <small>ひと</small>	髻 <small>まげ</small>	に	た	感	扉
か	へ	の	亂 <small>らん</small>	本 <small>もと</small>	へ	鳥 <small>とり</small>	れ	鳥	人 <small>ひと</small>	見 <small>み</small>	と	錦 <small>にしき</small>	か	の	花 <small>はな</small>
ら	ま	こ	と	や	つ	た	い	さ	も	う	繪	と	さ	の	盛 <small>さか</small>
朝 <small>あさ</small>	る	戀 <small>こひ</small>	く	ぐ	く	ね	ぎ	京 <small>きやう</small>	つ	の	謂 <small>いわ</small>	う	う	盛 <small>さか</small>	り
日 <small>ひ</small>	灯 <small>ともし</small>	な	な	ら	冬 <small>ふゆ</small>	な	よ	人 <small>ひと</small>	く	錦 <small>にしき</small>	つ	な	東 <small>ひがし</small>	か	な
か	か	ら	な	ら	柳 <small>やなぎ</small>	ん	さ	も	さ	か	な	し	山 <small>ま</small>	な	な
な	な	ん	る	に	柳 <small>やなぎ</small>	ん	さ	も	さ	な	し	山 <small>ま</small>	な	な	な

# 顔見世・關の扉・高麗家

・ 西尾福三郎 ・

幸四郎の關の扉は大正五年の顔見世に出て以來だから將に十五年振りの見參である。

「積戀雪關扉」は元の名題を「重重人重小町櫻」と稱して、天明四年十一月江戸桐座の顔見世に切狂言として初演された。

作者は初代櫻田治助、作曲は鳥羽屋里長、振つけは西川扇藏で、昨年の顔見世切狂言に出た戻り駕と何れも同じ人々の手によつて合作されたものである。戻り駕は關の扉より四年後に、これも矢張り中村座の顔見世の爲に書き卸された。

以上の二つを通覽しても分る通り、治郎作、與四郎が五右衛門と秀吉であつたり、關兵衛が六歌仙の大伴黒主であるといふ風に、假の名に隠れて黒頭巾の陰に世を忍ぶ人物が、最後に意表外な本名を曝露すると云ふやうな趣向が多い。

これは一つの芝居のお終ひを、單なる物語りの結びのみに終らせないで、花も實もある賑やかな大團圓にする必要から、所作事風に夢幻化する爲に往々突然な人物を登場させる事になるのである。

見廻はしのある所作事と云へば、關の扉、戻り駕は固より、法界坊の二つ面、吉野山の又五郎狐、道成寺等大ていこれに近い。こうした趣向の所作物は、特に昔の顔

## 「鳴神」のエロチシズム

倉田啓明



鷹治郎と左團次の絶えて久しき顔合せで、吉例の顔見世の人氣を呼ぼうとする作戦は近年にない妙策と、まづ冒頭から賞めてか、らう。その顔合せ狂言は、鷹の梶原に、左の大庭の「石切梶原」だと聞か私が私に編輯部から求めて来たのは、左團次の出したもの、一つである歌舞伎十八番の内「鳴神」の研究である。もつとも研究なんて鹿爪らしいは、この際おあづけにして、單に思ひ出したことだけをお話することにしたい。

左團次ほど歌舞伎十八番ものを、多く復活上演した俳優はこれまで他にない。ちよつと指を屈しても、「鳴神」「毛拔」「解脫」「關羽」

# 顔見世の關・扉の高麗家

見世狂言に好んで多く上演されたらしい傾向がある。尙ほ書卸しの時の役者は、關兵衛は秀鶴と云はれた元祖中村仲藏小町と墨染は、路考茶の三代目瀨川菊之丞、宗貞は二代目門之助であつた。

私はこの際、芝居狂言と違つて、見た日本位の所作物の筋立てを眞正面からとやかくと論索する事は止めたいと思ふ。たゞ世話味の勝つた舞踊なら、主として踊りの軽さと音楽の妙とを對比して味へば大體それでよいのであるが、關の扉のやうな時代が、つた舞踊はその外に衣裳の様々な色彩の變化に注意すべき事を云つておきたい。無論世話舞踊にも引き抜きによる衣裳の變化美はあるにはあるが、それは關の扉等の時代舞踊の複雑な數段の變化に較べたら格段に淋しいものである。

それと共に特に關の扉で注意すべきは、江戸歌舞伎獨特の大味な荒事の傳統を幾らか保ち残してゐる一事である。太い肩、強い目張り、頬の紅隈、荒い市松模様の着つけ、持物の大鏡等をみる時、初演の仲藏以來、五代目鼻高幸四郎から七代目團十郎によつて市川宗家の藝となり、九代目團十郎を経て當代幸四郎に到るまで、代々江戸荒事の本家筋へ傳はり來つた理由が首肯されやう。

更らに關の扉から戻り駕に移ると、この荒事氣分も單に限られた形の上にそれとも氣付かぬ位僅かな影を止めるのみで、關兵衛と治郎作とは、ともすれば間違ふ位よく似た風態をしてゐるのに氣がつくであらう。

「最清」などがある。然しながらこゝに注意すべきことは「鳴神」と「毛拔」の他は、みな新作の十八番ものであることだ。なぜといふにそれ等は藝題のみ残存してゐても、どんな内容のお芝居だか、脚本が湮滅してしまつてゐるので、内容の片鱗すらうかゞへないために、わづかに題名だけをとつて、いづれも今人が大方こんなものだらうと想像して、新に書卸したものなのである。

しかるに「鳴神」と「毛拔」だけは、さういふ意味合の新作十八番ものではなく、正真正銘傳來の歌舞伎十八番で、それが久しく上演されずゐるのを、左團次が復活したわけである。もつとも演出だけは、古人の型もなにも傳はつてゐないから、左團次が工夫を凝らしたものだ、脚本だけは古のものそのまゝを使用してゐることを、記憶してゐてもらひたい。

さて、その「鳴神」だが、この脚本の原名は「雷神不動北山櫻」といふのだ。そして初演は寛保二年の正月、大阪の佐渡島長五郎座

# 顔見世の關・扉・高麗家

優艶な常盤津を地にして、東風な寛潤扮装をした人物が、凡そ呑氣な廓話をして興する所にも彼此共通したナンセンス味がある。かくして戻り駕と關の扉は、顔見世狂言としては昔から離れ難い因縁を持つてゐる。

關の扉が古來顔見世に演じられる今一つの理由は、雪の關の扉と云ふ題名の示す通り、背景に冬の季題を持つてゐるからである。雪花の三部組曲の場合には雪の部に入れられるが、一方小町櫻を題材にしてゐる關係は花にも縁が深く、舞臺は吊枝の花と背景の雪とで、時ならぬ二つの場面を同時に現出してゐる。踊りは元々理屈抜きの眼正月、野暮は申さぬそれも賑やかで美しく至極結構である。この種の類型物に瀬川如阜の書いた二人黒主と云ふ顔見世狂言がある。これは一名新關の扉とも云つて今も時々上演されるが、この本名題には矢張り「雪花黒主」と冠せてゐる事が思ひ合される。今日の舞臺では、小町と墨染とを二人の役者が演ずる事が普通になつてゐるが、昔はこれを一人二役で演じてゐたものだ。その譯は、關兵衛と黒主の前後變化に對して、小町と墨染を一人二役で照應的に演分ける所に、能の前シテ後シテの氣分變化をねらつたものであらう。

以上高麗家演ずる所の關の扉の由來、並びに顔見世の大切狂言としての因縁を一通り説明して筆を擱く事にする。

で、市川海老藏即ち二世團十郎が演じたのである。江戸の古劇が大阪で書卸されたといふと、甚だ不思議に聞えるが、大體その時分の江戸歌舞伎の脚本の内容は、まだまだ上方歌舞伎のその足許へも寄れないほど、幼稚極まるものであつて、優れた作者らしいものもまだ輩出してゐなかつたのだ。それ故、歌舞伎の中心地はその源流と、もに、依然として京阪に存して、しかもこの寛保頃は、愈々歌舞伎劇が人形淨瑠璃の衰頽に代つて、極盛におもむかうとする機運が芽生た時代である。

さういふ時代に海老藏のために書卸された「雷神不動北山櫻」は五幕つゞきの長い脚本だが、作者の名は残念ながらわかつてゐない。しかも脚本としての價值は、いまから見てもよほど高く評價さるべき傑作である。理由は後に説くとして、もうひとつ面白いことには、この作にはおなじ十八番もの、「毛抜」まで包含されてゐる。つまり「雷神不動北山櫻」から「鳴神」と「毛抜」の二つの傑れた一幕物が後世に貽されたことになるのだ。



二つの古典劇

鳴神と關の扉

高谷伸

左團次には劇壇に寄與した二つの大きな功績がある。一は自由劇場による新運動であり他は歌舞伎十八番の再興による古典劇の紹介である。

前者の事は姑く措き、左團次によつて復興された十八番には毛抜があり不動があり解腕があり鳴神があり關羽があり、矢の根を加へれば、勸進帳、助六、暫の三狂言以外の十八番の中、再興されたもの、大部分は彼の手によつてゐるのである。それは彼の豪宕素樸な藝風が十八番に結ばせた事も一つの理由であらうが、歌舞伎劇の進路に對する目の高さをも忘れることはできない。

殊に「鳴神」は祈念と性慾との交錯を簡潔に描いて、純古典的な手法の中に、近代人にも首肯のできる題材を盛つたところ、或意味に於ける十八番中随一のものであるのみならず、代表的歌舞伎狂言として、ロシアへまで紹介されたものである。

本年六月南座の左團次一座の狂言を批難し殊に大正四年來南座七

そこで便宜上、ざつとその筋書をこゝで述べておかう。

序幕は大内裏の場で、諸國早越のため高德聖鳴神上人を招いて、雨乞の祈禱をさせようとする、黒雲坊がその代理にやつて来て、さんざん文句をならべる。二幕目は木の島明神の場で、雲の絶間姫と早雲王子とが、遊仙窟の間答、それが廻ると何處かの松原の場になつて、小野春風と相思の間柄の腰元小磯とが、小野家の重寶小町の短冊をもつてゐるのを知つて、石原瀨平といふ曲者があらはれてこれを殺し、短冊を奪つて去る。即ち「毛抜」はこゝからつゞくのだ。三幕目は小野春道の館の場で、家老の八劍女番と、その子の求馬とが、秦民部とその弟の秀太郎を嘲弄したところから、争ひにならうとするのを、腰元巻縮が止める。そこへ櫻町中納言が使者にやつて来て、雨乞の祈禱のために、小町の短冊を受取らうと迫るが、かんじんの短冊は奪はれてないので、驚きさわぐ折柄、文屋豊秀の臣の衆寺彈正が使者になつて来て、こゝに十

# 鳴神と關の扉

回の興行中三回まで鳥邊山心中を出したことの非を論じた時、然らば何を出せばよいかとの反問に對し、筆者の躊躇なく答へた狂言はこの「鳴神」であつた。

しかも、これ程の狂言が、明治大正昭和を通じて、東京とロシア以外では上演されてゐないのだから、當然、推薦すべきであり、この一幕だけでも、今度の顔見世には絶讚價値があるのである。

鳴神は、元祖市川團十郎によつて、貞享元年江戸山村座で上演され、つゞいて元祿九、十、十一年と上演され、二代目團十郎も寶永七年元祖の七回忌に演じてゐる。二代目の演じた脚本は「鳴神不動北山櫻」と題したものが傳へられ、これには鳴神の外に毛抜と不動をも含んでゐる。しかし鳴神が簡潔に完成されたのは、外ならぬ左團次の初演の時である。

行力によつて龍神を封じた鳴神上人が、姫の誘惑に敗れて失脚する題材は、能の一角仙人に通ずるものがあり、女性による通力の破壊は久米仙人の傳説を聯想させる。さればこそ往年の作者は衆寺彈正なる人物を配して鳴神上人に連續させたのである。

一角仙人から鳴神上人へ、天竺から日本へ舞臺は廻ると共に、歌舞伎的色彩はいよいよ鮮かになつた。白雲坊黒雲坊の酒脱味も面白くてきてゐるが、女犯による通力の失墜こそ永久に變らぬ人間性の弱點曝露である。

この内容と、大薩摩に始まり六法に終る代表的歌舞伎形式、この二つの完備こそ「鳴神」の絶對的舞臺價値なのである。

八番の「毛抜」の件になるのだ。その彈正は屢々左團次が演じて、京阪の人々もかつて見たことがあるだらうから、筋は省いておく。たゞこの場に出る小原の萬兵衛といふ敵役は前の曲者石原瀨平のことで、彈正のために斬られる。四幕目が桂團の巫の館で、いろんなこんがらがつた筋だが、直接「毛抜」や「鳴神」とは交渉がない。但しこの場に地下室があつて、阿部清行が監禁されてゐるなど、頗る探偵小説風な舞臺だ。そしてその返しが「鳴神」の北山鳴瀧の場で、鳴神上人と雲の絶間のエロシズムとなるわけである。それがどんなに面白い芝居か顔見世の舞臺でぜひ見てもらひたい。さてその場が廻ると北山の麓、雨が餘り降り過ぎて洪水になる。雲の絶間が鳴神上人に追はれて逃げて來て、あはや殺されようとする利辨、案山子の中から衆寺彈正あらはれ（こゝで海老藏の早替りとなる）、鳴神を殺して絶間を救ふ。大詰は雲の絶間と文屋豊秀の婚禮の席へ、鳴神の亡靈が現出してふたりをなやませるのを、不動明王ゆくりなく

# 鳴 神 と 關 の 扉

江戸時代の顔見世狂言らしい顔見世狂言の数々も、時代と共に清算されて、その倂の傳へられてゐるものは、ほんの少數に過ぎない。「關の扉」はこの少數の一つであつて、天明四年十一月、桐座の顔見世に演ぜられた「重重人重小町櫻」の大切であり、立作者は初代瀬川如阜であるが、淨瑠璃は劇神仙の雅號を持つ寶田壽來の筆である。

この狂言は顔見世狂言向きの變化に富んでゐる割に、首尾一貫した筋もあり、黒主の謀叛を中心に、暫くは始まつて、仲藏狂亂とし、傳へられる良實の狂ひもあれば、草紙洗ひの小町もあり、安貞墨染の勝五郎初花めいた世話場もあるといふ風で、殊に關の扉の場は錦繪的美しさから見ても、常盤津の面白さから説いても、これ亦、代表的歌舞伎狂言の一たるを失はない。

關の扉を演じた俳優も仲藏や七代目團十郎以來すくなくない。九代目團十郎の關兵衛、五代目菊五郎の墨染なども大いに賞讃されたと傳へられてゐる。

しかし、この種の古典の演出こそ清算されねばならぬ所のもので團菊の演出、必ずしも現代に於て正しいとはいへない。

團十郎が櫻痴居士に囑して淨瑠璃文辭の修正を加へた可否は問はぬとしても、關兵衛が盃を見る時、星ぐりを下ろさなかつたやうな理論は、理窟に即して歌舞伎の大味を失ふものであるし、菊五郎がモヂ張りの向ふに照明によつて姿を現はしたことは、電氣の珍らしい明治時代に於てこそ新演出として迎へられたかも知れないが、

も出現ましまして目度しく幕になるのである。

これだけの筋から考へても、いかに奇抜な芝居だかわかるだらう。しかもその簡潔で機智と諧謔に富んだ對話や、すばらしい技巧を凝らした點など、日本の古劇の典型的傑作である。殊に鳴神と雲の絶間のエロチックシーンの對話の妙は、泰西近代劇すら三舍を避けるものがある。然しこの名作も七代目團十郎が文化十年に「京詣雷神櫻」と改題して演じたのを最後に、久しく埋もれてゐたのを左團次が復活したのだ。しかも彼の演出は「鳴神」でも「毛抜」でも眞に完美の域に達して世評の高い傑作である。

殊に「鳴神」では左團次の優れたエロチシズムを推賞したい。エロと言へば和師師の鷹治郎の專賣のやうに心得てゐる人には、あの男性的な、荒削りで棒のやうに線の太い藝風の左團次には、ちよつと想像されないことかもしれないが、どうして「薩摩歌」の源現代としては當に、掛煙硝の昔に歸るべきが

# 扉の關と神鳴

道である。

岩井半四郎以來今も傳へられる「墨染といひやんす」のせりふ廻しこそ、關の扉の演出精神なのである。

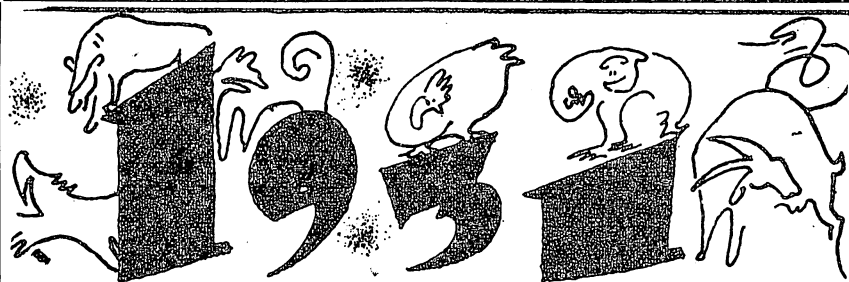
櫻の釣枝と雪布の矛盾も、歌舞伎美學からは許される道であるし、關兵衛の縁に白く香之圖を取つた着附、墨染の櫻色の衣裳、宗貞小町とりどりの色彩、櫻の巨木をとりまくさまざまの幻想、天明寛政以後の錦繪の美しさこそ關の扉の味であり、顔見世狂言の面白さである。

幸四郎の關兵衛、梅幸の墨染、共に當代の第一人者である。確定の役割は知らぬが、これに勘彌の宗貞、松蔦の姫と來れば、近來での理想的關の扉であることを信ずるものである。

(第五頁よりのつゞき)

である。この意味に於て、吉右の富樫や、源藏や、鷹治郎の梶原や、久兵衛や、幸四郎の松王や、關守や、左團次の「鳴神」など、如何に馴染なものであらうとも、茲に新たな観點から視なほすべき何よりの機會である。芝居なれば眼で見るとよからう、頭で見るとよからう、心臓で見るとよからう、併し、歌舞伎の遠き運命に關心をもつものにとつては、東西藝風の微妙なる交流作用こそ、年一度の顔見世狂言が與へる最も興味ある觀點ではあるまいか。

眼鏡印  
肝油



鳥江 例に依

つて年末の

清算をやつ

てみたいと

おもひます。

今度は内輪

の方は

かり集

つて貰

つて、

大川さ

んには

歌舞伎

の方を

徳田さ

んには

剣劇といふ

ことばは當

はまらぬこ

とですがそ

の方を、山

皆さんに新派のことをお話し願ひたいと思ひます。

鳥江 今年は東西松竹合併の第一年で、

道頓堀には近年に見られない種々な事

がありました。まづ鷹治郎が一月と二

月と五月の三ヶ月しか大阪で出演して

一九三一年を送る。。

## 道頓堀座談會

——於喜久屋樓上——

大川 澁江 徳田純宏  
山上貞一 鳥江鏡也

然し、五月に仁左衛門、六月に羽左衛門梅幸、十月に猿之助、十一月に吉右衛門など東京俳優の來演があつて賑はしい事でした。それに、三月には第一劇場、九月には、延若の活躍があります。

山上 矢張り鷹

治郎は大阪に

はなくてはな

らない人です

大川さん來年

からも矢張り

鷹治郎は大阪

より東京の方

へ多く出演す

るのでせうか

大川 いや、そんな事はありますまい。

鳥江 本年度の鷹治郎の大物は矢張り大

晏寺堤の春藤治郎右衛門でせうな。

大川 それは勿論ですが、まづ「新薄雪」

の民部之丞が變つてゐませう。

山上 一月では片倉小十郎に原田甲斐、  
春藤治郎左衛門、二月は石切梶原と富  
樫、五月には葛城民部之丞  
と吳服屋重兵衛、なるほど  
大阪出演では三月ですが、  
我々は鷹治郎を充分観てゐ  
る事になります。たゞこれ  
では十八番のやつしがない  
譯で、我々が寂しがるのも  
幾分白い處を見なかつた故  
もあると思ひます。

鳥江 魁車が随分活躍して  
ゐますな。

大川 孤軍奮闘で終ひには吉右衛門にも  
猿之助にも大阪軍代表で一人で附合つ  
てゐましたが、あれはよい事です。あ  
ゝしてゐると、俺も一番弟子を引連れ  
てでも一番發してみやうといふ氣にな  
つてゐます。然し、河内屋をあゝして  
地方巡業さしておく事は決してよい結  
果は來ないと思ひますな。

鳥江 處で一九三一年度の道頓堀で最も  
成功したものといふと……



新薄雪物語

(上) 清水寺の場 延若、壽三郎  
(下) 鷹治郎、長三郎、扇雀

山上 それは新派劇  
でせうな。なるほ  
ど歌舞伎の方もい  
ゝ成績でせうし、  
又新國劇にした處  
で新聲劇にした處  
で悪くないでせう

が、總括的に道頓堀でといふと新派は  
素晴らしい成績をあけてゐるものがあ  
ります。角座の河合喜多村、浪花座の  
東京新派と水谷八重子なんか素晴らし  
いと思ひます。七月の井  
上なんかもう、んでせう  
處でそれはいゝとして  
では肝心の大阪新派の成  
美團はどうなつたかとい  
ふと、一月の「堀江物語」  
頃の御全盛はいつかなく  
なつていつも下づみを勤  
めた仕末で、これは何と  
か甦生さして貰はなく  
は困ると思つてゐます。



近頃では實にいゝ成績です。  
山上 そうですな。おうちでは上半期で

徳田 新國劇も來阪の数は  
少かつたが成績はいゝ方  
でせう。私の方の新聲劇  
は辻野の病氣で鳥渡一頓  
座でしたが、結果からい  
ふと中田の復活を早めて

は鳥江君の「反逆する光秀」下半年期は徳田君の「中村大尉唐殺事件」など確かに記録的なものですな。それに北村君の「駒馬哲學」の上演は新聲劇の新天地開拓です。あの「駒馬哲學」や「大番頭小番頭」は私の方の領域のものですよ。

徳田 いや、あゝした方面への進展は一年程前から計畫してゐた事です。

山上 ぢや、私の方は來年度には鬻物に新境地を開いてさかんに脅迫しませう。どうも新派劇だから新物ばかりを演るといふ筆法は、観客にはあまり喜ばれないのではないかと思ひます。あの大入であつた、河合喜多村の時も「累ヶ滞」のやうな鬻物があり、「假名屋小梅」のやうなラシツクなものがあつた譯で、東京新派と八重子の時も「唐人お吉」といつた鬻物を演つてゐます。そこで新派劇

といふ看板に對して三つの狂言建の時は二つ新物に一つ鬻物とするのがい、のではないかと思つてゐますが。徳田 ぢや、僕の方は鬻物二つに、新物一つですか。い、でせうな。島江 大川さん、今度顔見世にも出ます



成美團、都築、藤村の「虹と兜蟲」

が「石切梶原」の梶原ですが、あれは「千本櫻」の梶原と石切とだけしか、梶原の事をよく書いてないそうですが面白い存在ですな。高安吸江博士のお説では……當時平家に與すれども先祖の古主に返忠（中略）假し夫故に世に

疎まれ佞人讒者と指さ、れ死後の悪名受けるともいつかないな厭はぬ所存鎌倉殿の政務の沙汰萬の下知をなすつる故名をけちく、と云はうなれと誠は武士の鑑とも世に輝きし男子也……など、作者も仰々辯明につとめて居ると仰つてゐますが。

大川 その石切梶原の出が鷹治郎の初演以來、從來のと違つてゐます吉右衛門の梶原は從來の型で揚幕から出て來る。だが鷹治郎は奥の上手から出て來る。つまり禮拜を終つた後の體で、これで刀劍を持つての花道が不思議でないが、揚幕からでは星合寺へ參詣せずに歸る事になる譯で可笑しな事になるのです。

山上 然し、い、狂言ですな。島江 喜劇の方から誰方も見えてるませんが道頓堀としては喜劇も仲々活躍してゐます。二月浪花座で家庭劇、三月



「梅小屋名假」の村多喜合河

は中座で五郎劇の創立三十年記念興行  
それが引續いて四月へ、浪花座の四月  
は家庭劇、五月は淡海、六月はまた家  
庭劇、七月は中座に五郎、浪花座に淡  
海、八月は引續いて興行、九月は浪花  
座で家庭劇、と數えてみると仲々大し  
たもんです。中でも五郎劇の三十年記  
念興行は珍らしい長期興行でした。

山上 なるほど、家庭劇もよく活躍して  
りますね。それが九月限り解散したの  
は全く惜しい氣がします。どうして劇  
團はうまく成長しないのでせうな。



「秀光るす逆反」の氏也鏡江島  
(劇 聲 新)

大川 處で大阪としてはとにかく、京都  
だから關西として、今年中での歌舞伎  
の書卸し物の收穫はまづ菊五郎の「土  
俵一本刀」でせう。

山上 そうでせう。全くいゝもんでし  
た。

鳥江 僕は残念にも見落しました。  
徳田 あれは全く脚本を讀んだ時より數



「郎八長並戸」の村多喜・車魁・若延

等の上出来でしたね。  
大川 菊五郎の舞臺監督でしたから、主  
演俳優として舞臺監督としても、菊  
五郎の眞價を發揮した事になります。  
山上 實に周到なもので演出家としても  
種々と教えられました。前半取の間





猿之助、八百藏の // 彌次喜多東海道中記 //

のよさは格別でしたね。

徳田 あの前取の引込みに五度も六度も、しかも揚幕に這入つてからも「有難うござんす」と涙ぐましい聲で返答つてのお辭儀は全く敬服しました。あれは菊五郎でなくては揚幕の中なんか悪落ちが來ますよ。それに誰一人立つ人が無かつたのには感服しましたな。

鳥江 大話の立廻りには角力取を呼んで角力の手での格闘を研究したなんか、菊五郎らしい努力ですね。

大川 道具調べの時に感心したのは、照

明のアンバアの係を呼んで「おい、君、僕は菊五郎だよ。こゝをもう少し明るくしてくれ。いゝか、僕が頼んだよ。菊五郎が頼んだよ」と命じてゐたのには、斯うあつて欲しいと思ひましたよ。

徳田 主演俳優はそうあつて欲しいもんですな。



水谷八重子の // 唐人お吉 //

大川 あの時役者を上げたのは東京の福助ですな。

山上 そうです。すつかりだるま茶屋の女になり切る事が出來たのはえらいもんですよ。

鳥江 さて、大阪に歸つて、文樂で演つた同志座なんか記録的にあけていゝもんだと思ひますな。狂言の選擇に批評はあるかと思ひますが、俳優がその計畫に對して又組織上や經濟上の問題なんか比較的確のいゝと意見を述べてゐることは、事だと思ひます。

大川 鴈之助に霞仙なんか、仲々いゝ頭腦の持ち主です。十二月にもまた演らうかと計畫してゐたんですよ。

山上 歌舞伎俳優の「同志座」それに私達が此間演つた新派俳優の「自由劇場」とも、昨年迄の單なる研究劇に止まらないで、失業救濟の意味がふくまれて來たのは注目すべき事です。

鳥江 いろ／＼有難うございました。一九三一年の清算もこれで十分だと存じますので閉會します。

# 劇壇往來

## 南座吉例顔見世興行

十二月一日初日  
晝の部午前十時開幕  
夜の部午後五時開幕

【狂言】【晝の部】 第一大森痴雪、村井富男合作「都路豊後掾」二幕・第二坪内逍遙作雜誌改造所載「良寛と子守」一幕常盤津連中・第三岡本綺堂作杏花戯曲十種の内「佐々木高綱」一幕・第四「梶原平三試名劍」星舍寺の場・第五歌舞伎十八番の内「勸進帳」長唄連連中【夜の部】 第一、「菅原傳授手習鑑」寺小屋の場・第二歌舞伎十八番の内「鳴神」大陸摩連中・第三玩辭樓十二曲の内「梶久末松山」二幕・第四「積懸雪關扉」常盤津連中

【役割】 梶原平三景時、梶屋久兵衛（雁治郎）都路豊後掾、娘稍、源義經、松山大夫（福助）蜂屋喜右衛門、春藤支番、柴田定之進（壽三郎）加賀太夫、牢役人、駿河次郎（政治郎）姉おみの奴駒平、女房千代、番頭嘉右衛門（魁車）座頭に扮する男、太刀持藝子市子（章景）同心石原彌太郎（箱登羅）太幸春臺、天満屋喜之助（市藏）○佐々木高綱、大庭三郎、鳴神上人（左團次）娘梅野、雲の絶間姫、許婚おさん（松薦）小娘およし、娘薄衣、片岡八郎、漣くり與太郎（しうか）番卒、百姓五作（吉之丞）下女お秋、女房小浪、小町姫（時藏）富樫左衛門武部源藏（吉右衛門）○良寛、馬飼子之助俣野五郎、分銅屋金三郎、良峯宗貞、墨染櫻の精（勘彌）文字太夫、佐々木小太郎、龜井六郎、白雲坊（延升）柴田半左衛門、僧智山、囚人吞助、常陸坊海草、黒雲坊、親爺壽徳齋（左升）番卒、百姓鋤右衛門（七三郎）御臺園生の前、母およし（源之助）六郎太夫、武藏坊辯慶、松王丸、但馬主膳關守關兵衛實は大伴黒主（幸四郎）

## 花形大歌舞伎

角 座

十二月一日初日  
晝の部十二時開幕  
夜の部五時半開幕

【狂言】【晝の部】 第一近松門左衛門作食満南北作「高野山女人堂心中萬年草」二幕第二「鶴山姫捨松」雪責の場・第三所作事「釣女」常盤津連中・第四「艶容女舞衣」酒屋の場【夜の部】 第一「壽曾我對面」一幕・第二「近江源氏先陣館」盛綱陣屋の場第三「定助權八鎗一筋三鳥驛路」一幕・第四「新版歌祭文」野崎村の場

【役割】 太郎冠者、鎗持定助、平井權八（長三郎）成田久米之助、中將姫、醜女、昔屋半七、嫁お園、佐々木三郎兵衛盛綱、久作娘お光（扇雀）○待女桐の谷、高綱妻鑢火品川伊平太（成太郎）岸の和田の九兵衛、侍女浮舟、曾我十郎祐成、伊吹藤太、久住隼太、丁稚久松（駒之助）雜賀屋與次右衛

門、茜屋半兵衛、小林朝日奈、和田兵衛秀盛、比良友之進、百姪久作（九圍次）祐辨律師、美濃屋作右衛門、大磯の虎、盛綱妻早瀬、下女およし（鷹之助）姉おさつ岩根御前、大名、工藤左衛門祐經、母微妙（吉郎）○娘お梅、美女、美濃屋三勝、油屋娘お染（延太郎）有村主膳、曾我五郎時政、竹下孫八（壽之助）伊吹千右衛門、横佩豊成卿、舅宗岸、北條時政、水尾十郎左衛門（橘三郎）

志賀 淡海劇  
 廻家 二の替り  
 お名残り  
 浪花座  
 十一月一日 初日  
 ヒル十二時 二回開演  
 ヨル五時半

【狂言】 第一「笑顔」二場。第二「旅鴉」（京城の巻）三場。第三「旅鴉」（釜山の巻）三場。第四「珍婚旅行」三場  
 【配役】 尾上長二郎、市川雁之助（龜鶴）

頭取、按摩安吉（辨慶）下足番、親戚平井（樂太）重役月ヶ瀬、事務員元山（白石）藝妓梅香、娘つる、母鶴子（時次）夫人雪子師匠六津賀（里路）友人春田耕、藝妓艶榮海老名軍藏（辨天）近所の女房、花嫁なみかもめ）建築請負師實川燕之助（源五郎）多助弟國三、劇場主任山下、仲人近藤金太郎（十太郎）雪子の父嘉兵衛、曾我太郎（太郎）魚屋多助、仲人代理小田（淡海）

曾我廻家五郎劇一座  
 吉例師走興行  
 中座  
 十一月二十九日 初日  
 毎日午後四時開幕

【狂言】 第一「戀愛遊戯」一場。第二大阪時事新報所載「日支隣同志」二場。第三「畏から畏」二場。第四「笑を忘れた人々」二場第五「結婚第一夜」一場  
 【配役】 山田萬吉、實業家勝山、ルンペン

小林平吉、電車運轉手前川（五郎）小使瀨野、勞働者寅公、番頭太田七兵衛、鐵詰問屋福井、旦那部（蝶六）車掌高橋廣子、妻菊子、妻延子、母おつね、主婦お棍（大磯）運轉手沙山、理髮屋壯敏良、伯父佐久間、下男九八、情夫野口（小次郎）運轉手八瀬、父大瀧茂兵衛、暫間平作、質屋の隠居、仲人石田金藏（五樂）運轉手加納、小使源助、事務長前田、町内の夜警、伯父藤井（一朝）車掌稻田朱子、會社員佐々木、女將お國、質屋の悴、妻お春（林蝶）車掌山村道子、妻榮子、藝妓若童、娘高子（秀蝶）車掌常子、妻お市、藝妓お龜、質屋の妻お元（時和）車掌大井澄子、音樂狂奈良谷、妻お藤、花嫁花榮（桃蝶）運轉手吉川洋食屋主人近松、書記寺田、大工の棟梁、運轉手井上（時右衛門）事務員浦賀、看板店主山田、院長樺山、會社重役（四郎）運轉手花井、公平會主人大瀧、醫者北村、重役夫人、母お光（五郎丸）

## 編輯後記

曆の上から行けば、本號（顔見世十二月號）を出してしまへば、本年の仕事は正に終つたやうなものだが、事實は決してさうではない、まだ、このあと新年號を年内に出さなくてはならないので、本年棹尾の仕事をして居るやうで、さうでないのが、編輯の仕事だ。

×  
編輯ばかりでなく、芝居の仕事はすべてこれと同じで、來月、さ來月の準備をして行かなくてはならないので、

先に先に行つて行くためか、月日の立つのが實に早い様な気がする。

去年の顔見世號の後記を書いてから滿一年——とても、そんな感はしない。

×  
一年の間には、内からも外からも、叱正鞭撻の言

葉を、時にはうるさい（と云つては失禮だが）程頂戴した。お蔭様で逐號、刷新の實を擧げる事の出來た事を、御高示を賜つた諸先生、先輩皆様にも、誌上ながら厚く御禮を申し上げます。

×  
本號は、梅幸丈の來京中止や、狂言の變更、吉右衛門丈の出演等、締切近くなつて、可成り本誌としても重大事件が突發したために、豫定の一日發行が遅れました。

そのために、記事の方も出來得る限りに補いはいたしましたが、何分日時がないたために、大體變更以前の方針に依るの止むを得なかつた事も御了知願ひます。

然し、顔見世は、前代未開の大顔合せに、狂言も晝夜とも粒選りで、各狂言の考證、解説、批判ともに、諸先生がそれ〴〵蘊蓄を傾倒され、珠玉の稿を得、寫眞版を斷然廿四頁に増し、茲に道頓堀特輯の偉容を整へました。

（住 田 生）

昭和六年十二月一日發行

月刊『道頓堀』第六十三輯

◇ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇ 郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。

◇ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社  
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾五錢（貳錢稅）

昭和六年十一月卅日印刷  
昭和六年十二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 鳥江 鏡也

大阪市東區船場南之町一丁目

印刷者 北島 竹次郎

大阪市東區船場南之町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

電話（一四〇番）  
（六六四五番）

秩父宮妃殿下 (昭和三年十一月十五日)

高松宮妃殿下 (昭和五年四月二十七日)

御慶事ニ際シ献上御嘉納ノ榮ヲ賜ハル

# 國榮名古屋帶

# 國榮丸帶

ウラオモテ、ガラカワリ

御婦人の大嘉び

時代要求丸帶

御買入に御注意

今に全世界此帶なる

デパート及各地有名呉服店にあり

奥様の丸髻姿

ハイカラに

帶は國榮に

勧め人々

發賣元



吉村商店

京 都 五 條



一本の帯の  
右左の柄替り

織物一式  
染物一式  
加工縫一式

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年十一月三十日印刷  
昭和六年十二月一日發行

# クラブ美身クリーム

若き日は 人生の黄金時代

その若々しさと

うるはしさを

いつまでも保つことが

確かに出来ます

クラブ美身クリームの御愛用によつて



「道頓堀」第六十三輯 第六年十二月號

本號に限り  
一部 金參拾五錢 (郵稅 貳錢)